

比 恵 遺 跡 群 26

— 比恵遺跡群第59次・第60次・第61次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第562集

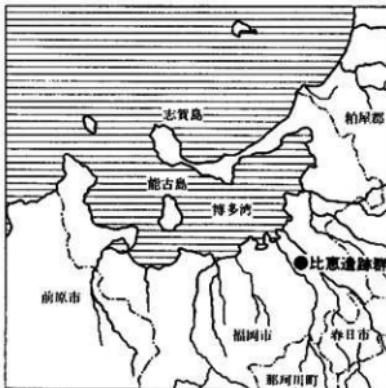
1 9 9 8

福岡市教育委員会

比恵遺跡群 26

— 比恵遺跡群第59次・第60次・第61次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第562集



遺跡調査番号 9627・9668・9673
遺跡略号 HIE59・HIE60・HIE61

1 9 9 8

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と歴史が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では、近年の開発事業にともなってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告書に収録した比恵遺跡群第59次・第60次・第61次調査は、かねてより弥生時代の集落遺跡として著名であった比恵遺跡の範囲内で行われた発掘調査であり、多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が、文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田英俊

例　　言

1. 本書は、平成8年度に実施された比恵遺跡群第59次調査・第60次調査・第61次調査の概要を報告するものである。なお、同年に実施した第58次調査に関しては、「比恵遺跡群25」福岡市埋蔵文化財調査報告書第561集で報告している。
2. 第59次・第60次調査は大庭廉時が、第61次調査に関しては長家伸が、それぞれ編集・執筆し、大庭が全体をまとめた。
3. 本書では、第59次・第60次・第61次調査のそれぞれの報告のページの前に扉を挿入し、例言と目次を付けている。本書を利用されるに当たっては、そちらをご参照いただきたい。

本 文 目 次

序説	1
第59次調査	3
第1章　はじめに	5
第2章　発掘調査の記録	8
第3章　小結	26
第60次調査	27
第1章　はじめに	29
第2章　発掘調査の記録	31
第3章　小結	62
第61次調査	63
1.　はじめに	65
2.　調査の記録	66

序　　説

比恵遺跡群は、昭和13・14年（1938, 1939）、区画整理に際して銳山猛・森真次郎氏によって最初の調査が行われて以来、弥生時代の環溝集落遺跡として知られるようになった。その後、市街地化が進み、旧来の起伏に富んだ地形景観は、全く失われ、著名な遺跡も家並みの中に埋没してしまった。さらに、昭和50年代以降、比恵遺跡群が所在する博多駅南地区は都市基盤整備が進み、事務所ビル・高層共同住宅の建設が相次ぐようになってしまった。

福岡市教育委員会文化課（現在の埋蔵文化財課の前身）は、1980年に比恵遺跡群を重点地区のひとつとして指定し、開発計画が上がると、遺構の遺存状態を確認するための試掘調査を実施し、開発行為による埋蔵文化財の破壊がやむを得ないと判断された場合には、記録保存のための発掘調査を実施している。

平成8年度には、第58次調査から第61次調査まで、4地点の発掘調査が行われた。本書で報告するのは、福岡市営住宅の改築による第58次調査を除いた3地点の調査成果についてである。いずれも、民間の開発行為にともなう発掘調査であり、一部現時点でいまだに着工されていない地点もあるが、すべて記録保存にとどまっている。

なお、第58次調査については、別途『比恵遺跡群25』福岡市埋蔵文化財調査報告書第561集として刊行されるので、そちらもご参照いただきたい。

第59次調査

遺跡調査番号	9627	遺跡略号	HIE-59
調査地地番	福岡市博多区博多駅南4丁目120-1		
開発面積	492.36m ²	調査対象面積	200m ²
調査期間	1996年7月31日～8月26日	分布地図番号	37-0127

第60次調査

遺跡調査番号	9668	遺跡略号	HIE-60
調査地地番	福岡市博多区博多駅南5丁目89, 89-3		
開発面積	596.36m ²	調査対象面積	596m ²
調査期間	1997年1月27日～3月31日	分布地図番号	37-0127

第61次調査

遺跡調査番号	9673	遺跡略号	HIE-61
調査地地番	福岡市博多区博多駅南6丁目62		
開発面積	1,011.27m ²	調査対象面積	400m ²
調査期間	1997年3月3日～3月24日	分布地図番号	37-0127

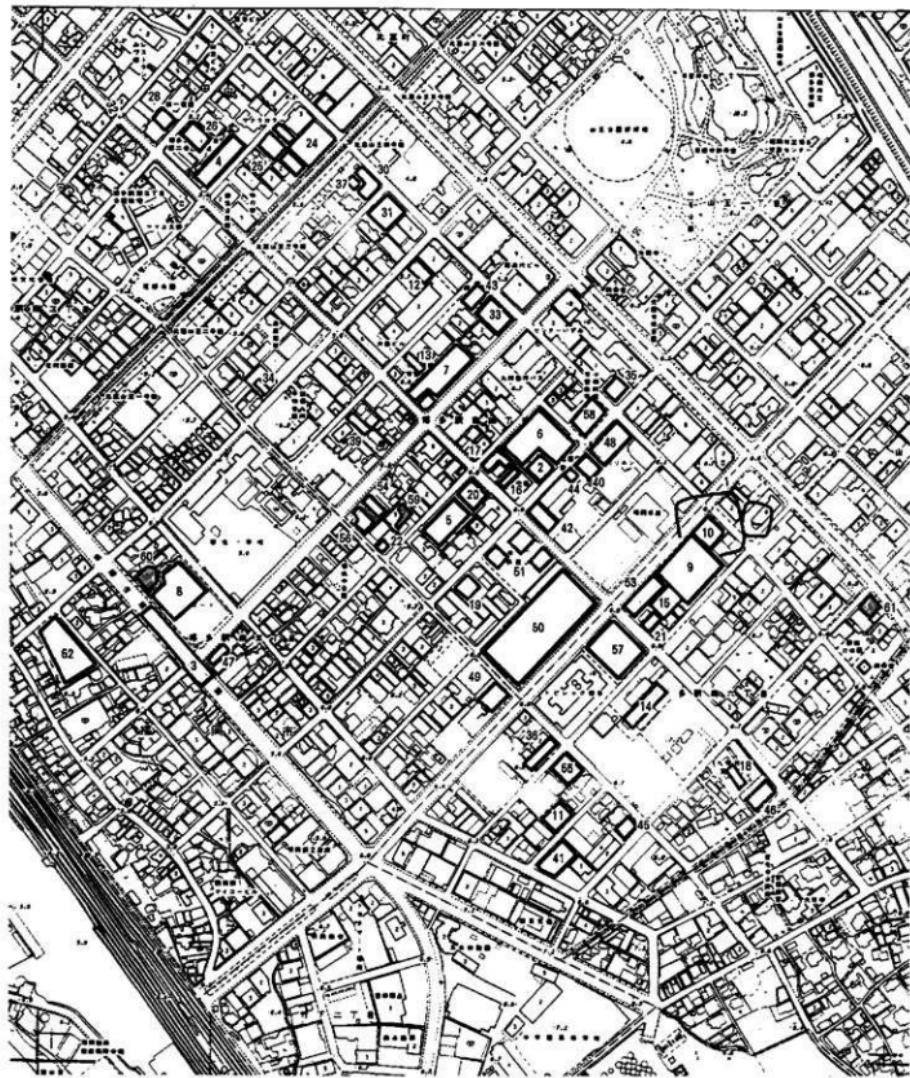


Fig. 1 比恵遺跡群調査地点位置図 (1/5000)

第 59 次 調 査

例　　言

1. 本章は、立体駐車場建設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、比恵遺跡群第59次調査（福岡市博多区博多駅南4丁目120-1）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭・土倉崇子（九州大学）が作成し、折茂由利が添書した。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、井上涼子・上塘貴代子・大浜菜緒・大庭康時が作成し、森本・井上・上塘・折茂が添書した。
6. 遺構写真・遺物写真是、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・岡山良子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・小田麻美子・深田みどりがあたった。
8. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

本　文　目　次

第1章 はじめに	5
1. 発掘調査にいたる経過	5
2. 発掘調査の組織と構成	5
3. 周辺の調査成果	6
第2章 発掘調査の記録	8
1. 発掘調査の経過と概要	8
2. 遺構と遺物	11
(1) 土坑	11
1号土坑	11
2号土坑	12
3号土坑	12
4号土坑	12
5号土坑	14
(2) 井戸	15
1号井戸	15
(3) 溝状遺構	16
1号溝	16
2号溝	21
3号溝	24
4号溝	24
5号溝	24
(4) その他の遺物	24
第3章 小結	26

第1章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

平成8年5月10日、株式会社明東代表取締役藤山佳子氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区博多駅南4丁目120-1にかかる埋蔵文化財事前調査願いが提出された。申請地は、弥生時代の集落遺跡として著名な比恵遺跡群に含まれ、隣接地でもこれまでに数次の発掘調査が実施されていた。事前調査願いを受け付けた埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要であると判断し、5月13日その旨を回答した。

試掘調査は、既存建物の解体を待って、6月4日に実施した。その結果、現地表下60センチ前後で遺構が検出されたが、解体した建物部分は完全に破壊され、それ以外にも申請地中央付近には大規模な搅乱があることが確認された。

これを受けた埋蔵文化財課では、開発計画は立体駐車場の建設であり、基礎工事によって遺構が破壊されることは避けられず発掘調査が不可欠であると言う方針で、株式会社明東・有限会社シンワ企画と協議を重ねた。最終的には、同年8月1日より一ヶ月間で発掘調査を実施することで同意を見た。発掘調査には、7月いっぱいまでの予定で博多区中呉服町で博多遺跡群第98次調査を担当していた大庭康時があたることになった。

平成8年7月26日に現地での最終打ち合わせ、同31日バックホーによる表土掘削、8月1日博多98次調査現場より調査機材を搬入し、発掘調査に着手した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	有限会社シンワ企画	代表取締役	藤山 容嘉
調査受託	福岡市長		桑原 敬一
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊
調査範囲	同 埋蔵文化財課	課長	荒巻 輝勝
	同	第二係長	山口 順治（前任）
調査庶務	同	第一係	西田 結香（前任）
			河野 淳美（現任）
調査担当	同	第二係	大庭 康時
調査作業	土倉崇子（九州大学） 石川君子 片口正愛 江越初代 大久保五枝 大久保学 大庭智子 河野恒子 岸本祥子 洪村和憲 清水明 杉山正孝 関加代子 関義種 曾根崎昭子 都野浩之 水賀和代 長田嘉造 施丸勢津子 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 吉田清		

このほか、発掘調査の条件整備や便宜など、株式会社明東のご協力を得た。記して、感謝の意を表すものである。

3. 周辺の調査成果

比恵遺跡群においては、既に60次を越える発掘調査を実施してきた。ここでそのすべてについて概説することは不可能なので、第59次調査に近接する地点について、その概要を記し、以下の報告の資料としたい。

第5次調査（1981年）

第59次調査地点の南東に位置する。民間の自動車会社建物建設にともなって、発掘調査した。

既存の建物の基礎による搅乱を受けていたが、遺構は全面に濃密に分布していた。弥生時代中期から古墳時代前期にわたる竪穴住居跡42軒、弥生時代の掘立柱建物跡23棟、井戸3基を検出した。

報告書は未だ刊行されていない。

第54次調査（1994年）

第59次調査地点の西に接する。事務所ビル建設にともなって発掘調査を行った。

現況は宅地であり、建物の基礎などで破壊されではいたが、おおむね遺存状態は良い。弥生時代中期後半から後期前半の竪穴住居跡10軒、同時期を主とする掘立柱建物跡7棟、弥生時代後期初頭の井戸2基、土坑4基を検出した。古墳時代の遺構はみられなかった。

注目すべき遺物として、弥生時代後期初頭の第1号井戸から性格不明の板状木製品が出たした。ヒノキの斜め取り材を用いている。表面に赤色顔料を塗布し、精巧な幾何学文様（円彌・鋸歯・綾杉文を組み合わせる）を陽刻した凸弧の階段部を持ち、その外側に4条の小孔列を配する。著として新聞報道したが、柄などが不明であり、断定できない。報告者は、奴国入り口と考えられる比恵集落に掲げられた屋外標識としての用途を想定している。

山口謙治「第54次調査の報告」『比恵遺跡群23』福岡市埋蔵文化財調査報告書第520集 福岡市教育委員会 1997年

第56次調査（1995年）

第59次調査地点の西に位置し、第54次調査地点と隣接する。事務所ビルの建設にともなって発掘調査を実施した。

既存の建物によって大きく削平されていた。弥生時代中期の竪穴住居跡2軒、弥生時代後期の掘立柱建物跡1棟、土坑などを検出した。後期後半以後の遺構は、見つかっていない。削平を念頭においても、遺構密度が東で濃く、西で極端に薄いという傾向は指摘できる。比恵遺跡群が立地する中位段丘の、一支丘陵上に立地した集落の西端を確認したものと考えられる。

大庭康時「第56次調査の報告」『比恵遺跡群23』福岡市埋蔵文化財調査報告書第520集 福岡市教育委員会 1997年

以上の調査成果をまとめると、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡を主とする集落跡の存在が知られる。第5次調査地点の北東には、第20次調査・第17次調査・第16次調査・第6次調査・第58次調査・第35次調査地点が連続して並んでおり、同時期の遺構が検出されている。この範囲内に仮にいくつかの核的なまとまりがあるとしても、全体として一連の集落と見れば、第54次・第56次調査地点付近はこの集落の西端、第59次調査地点はそのすぐ内側ということができる。

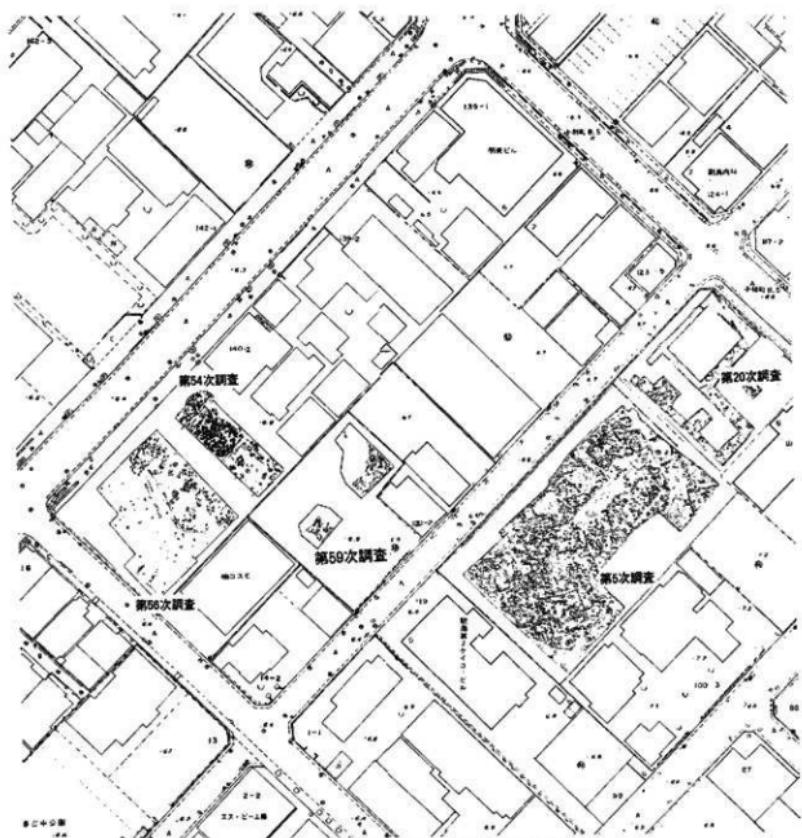


Fig. 59-1 第59次調査地点位置図 (1/1000)

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の経過と概要

発掘調査には、1996年7月31日の表土掘削から着手した。表土は、バラスと盛土からなり、その下に薄く遺物包含層が残っていた。表土掘削にはバックホーを用いたが、盛土層を完全に除去し、遺物包含層を浅く削り込んだ位まで掘り下げた。調査対象地には、既存建物とそれ以外にも大規模な擾乱があり、分散的に、きわめて限られた部分にしか遺構が残っていなかった。それに応じて、表土掘削も大きくふたつの区画に分かれて、実施した。

発掘調査作業は、まず包含層掘り下げと遺構検出を平行して行った。包含層と言ってもかなりの部分が切り合った遺構埋土と推測されたため、小トレーナーを設定するなどその確認につとめた。しかし、包含層とした黒色粘質土上では、切り合いを識別できず、包含層を1~13に細かく区切り掘り上げることにした。結局、遺構はすべて地山の黄褐色粘土（鳥栖ローム層）上面で検出・調査した。

8月14日~19日は盆休みとしたが、14日には台風12号が襲来した。前日に台風予防をしておいたため、掘り上げた遺構に水がたまつた程度で、大きな被害は出なかった。盆休みに先立つ8月12日には、全景写真を撮影、休み明けは遺構実測と掘り足しを行った。22日には、調査機材を次の発掘調査現場である吉塚遺跡群第4次調査現場に搬出、23日には出土遺物を那珂整理室に運び、26日にバックホーで埋め戻しを行い、すべての調査工程を終了した。

擾乱のため、申請面積492.36平方メートルに対し、調査面積は131.27平方メートルにとどまった。出土遺物は、弥生時代土器・古墳時代土師器がコンテナ39箱、石器（黒曜石剥片がほとんど）標本箱1箱である。



Ph. 59-1 第1区全景（北西より）

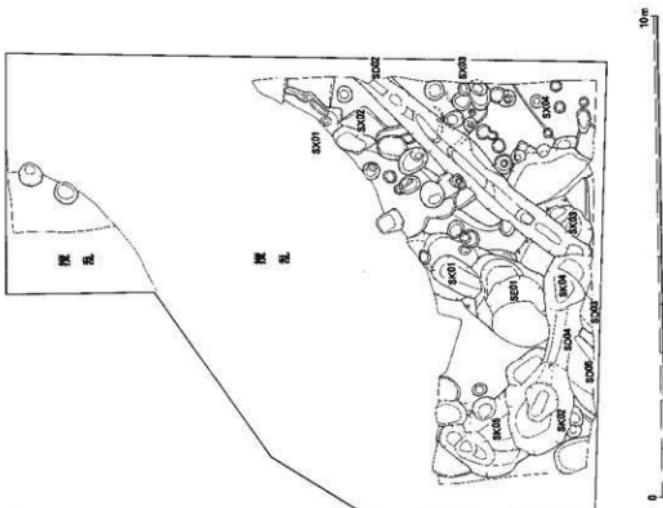
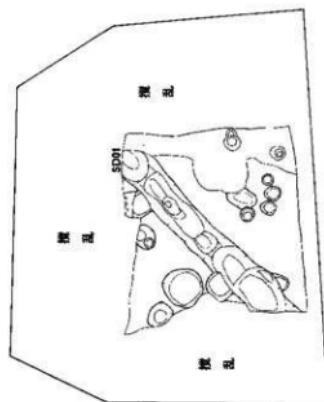


Fig. 59-2 遺構全体図 (1/100)





Ph. 59-2 第2区全景（西より）



Ph. 59-3 第2区（南より）

2. 遺構と遺物

遺構は、すべて鳥栖ローム面上で検出した。東区の西側3分の2ほどの範囲においては、実はこの上に厚さ10センチ内外で黒褐色粘質土の遺物包含層が乗っていた。これは、比恵遺跡群における通常の遺構埋土と同質の土であり、これ自体遺構埋土である可能性が考えられた。しかし、精査・検討にもかかわらず、黒褐色粘質土の上面では、遺構を確認することはできなかった。

第59次調査では、土坑6基、井戸1基、柱穴48基、溝状遺構5条を検出した。竪穴住居跡、または竪穴住居跡を示す柱穴の並び等は、確認できなかった。ただし、竪穴住居跡を思わせる落ち込みは、東端付近でみられた(Fig. 59-2, SX01~SX04)。埋土出土遺物によれば、弥生時代後期前半である。

土坑は、不整形の掘り方を持つものが多く、壁面も底面も段掘り状で凸凹が激しい。すべて、廃棄土坑と考えて良かろう。

井戸は、素掘りである。現代の井戸に切られている。

溝状遺構としたものは、U字形の断面で細長くのびる遺構である。遺構との切り合いのため、全体の形状が知れるものは、2条しかない。ただし、底面は土坑状に凸凹で、水が流れた形跡はない。区画溝と見るべきか。

柱穴では、柱痕跡を残すものはなかった。据立柱建物等も復元できていない。

以下、遺構の種類別にその概要と出土遺物を紹介する。

(1) 土坑

1号土坑

1号井戸に切られた土坑である。長軸116センチ、短軸60センチの椭円形を呈し、深さ36センチをはかる。弥生土器の小片が出土しており、弥生時代後期の土坑と思われる。



Ph. 59-4 2号土坑（南東より）

2号土坑

長軸190センチ、短軸152センチの楕円形の土坑である。深さ82センチをはかる。床面の一部は、さらに二段掘り状に8センチほど下がる。

Fig. 59-3-1～12に、出土遺物を示す。1・2は、壺の口縁である。口縁を、鉢状にする。器表は摩滅しており、調整痕が残らない。3は、鉢の口縁である。器表は摩滅し、調整痕が残らない。4～7は、壺の口縁である。4は口縁の下に、断面三角の突帯を張り付ける。5は、口縁の上面に刻み目をつける。4・5の器表は摩滅しており、調整痕が残らない。6・7の器表も摩滅するが、6では外面の縦刷毛目、内面の横刷毛目が、7では外面の縦刷毛目が微かに見て取れる。8～10は、壺の底部であろう。8・9は、平底、10は上げ底気味に作る。調整痕の残りがよい9で見ると、外面は縦方向の刷毛目調整、内面も縦方向の刷毛目調整で、内底部付近は指押さえとなで調整する。11は、器台である。全体に摩滅するが、指押さえである。12は、壺の底部である。内面はなで調整、外面は刷毛目調整である。

このほか、ひさご形土器片・黒曜石剥片が出土している。

弥生時代中期中頃の土坑である。

3号土坑

2号溝に切られた土坑である。半ば程度を失うが、径70センチの略円形を呈し、深さは30センチをはかる。

弥生土器壺片・高坏脚部破片などの小片が出土している。

弥生時代後期の遺構と思われる。

4号土坑

2号溝に切られた土坑である。長軸138センチ、短軸92センチの長方形を呈する。底面は二段掘り状となり、浅い部分で深さ52センチ、深い部分で80センチをはかる。



Ph. 59-5 4号土坑（西より）

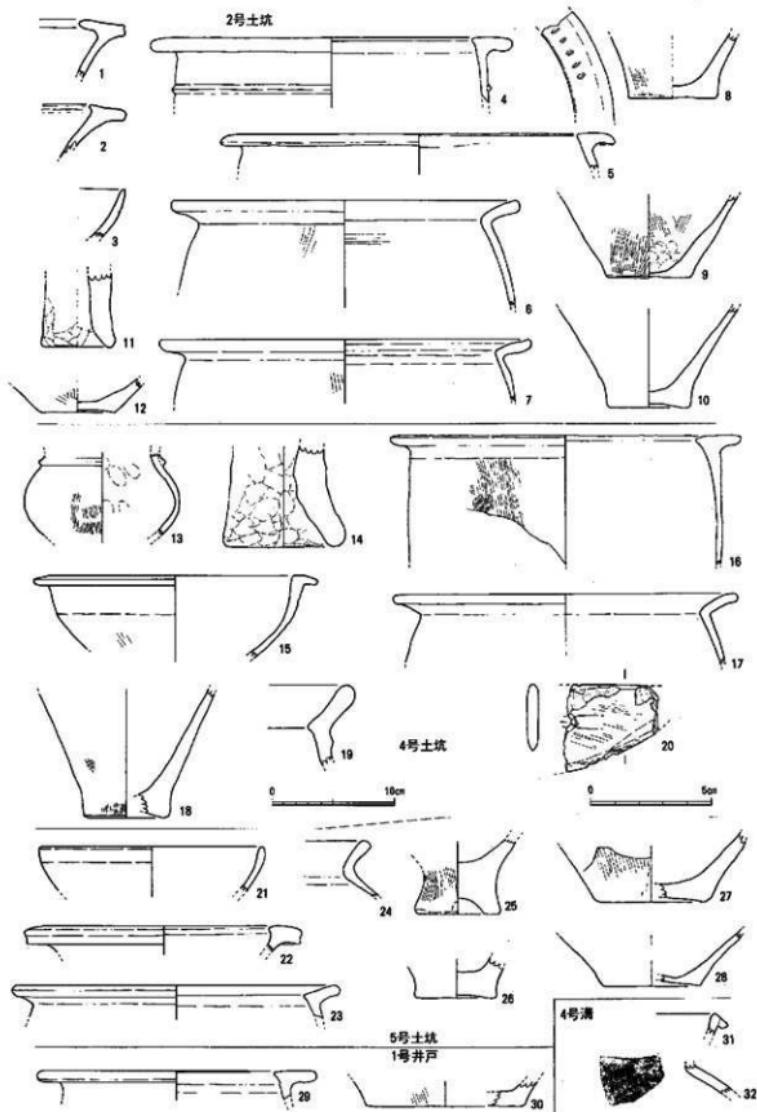
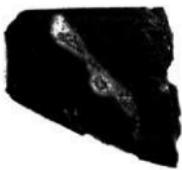


Fig. 59-3 2号・4号・5号土坑・1号井戸・4号溝出土遺物実測図 (1/4, 20…1/2)



20



20

Ph. 59-6 4号土坑出土遺物

Fig. 59-3-13~20に出土遺物を図示する。13は、壺である。球形の胴部で、頸部直下には断面三角の突帯を貼り付ける。内面はなで調整、外面には細かい単位の刷毛目が残る。14は、器台である。指押さえで調整する。15は、鉢である。内面は、指なで平滑に仕上げる。外面の一部には、刷毛目調整痕が残る。16~19は、壺である。16の体部外面には、縱方向の刷毛目調整がみられる。18は、上げ底の底部である。外面は刷毛目調整、内面に平滑になる。19は、大型の壺である。口縁直下に、断面三角の突帯を貼り付ける。20は、石包丁である。輝緑凝灰岩製で、丁寧に研磨している。

このほか、角が張った袋状口縁壺、ひさご形土器片、若干丸底化しかかった壺の底部、黒曜石剥片などが出土している。

弥生時代後期前半の土坑である。

5号土坑

2号土坑に切られる。全体の形はわからないが、長椭円形の大型土坑であろう。深さは、55センチ前後をはかる。

Fig. 59-3-21~28に出土遺物を示す。21は、鉢である。22は、壺の口縁である。23・24は、壺の口縁である。25~27は壺の底部で、25は上げ底に、26・27は上げ底気味の平底に作る。体部外面は縱方



Ph. 59-7 5号土坑（南より）

向の刷毛目調整、内面は平滑にて調整を施す。28は、壺の底部である。器壁が荒れて剥落しており、調整痕は認められない。

弥生時代中期前半の土坑であろう。

(2) 井戸

1号井戸

東区のほぼ中央から、現代の井戸に切られて検出した素掘りの井戸である。直径171センチ前後の略円形を呈する。水中ポンプで排水しながら深さ170センチ付近まで掘り下げたが、湧水が激しく下部まで調査できなかった。バックホーで埋め戻しを行ったときにたち割りを試みた。遺物の出土はほとんどなく、また底の検討も十分にできなかったが、素掘りであることは観察できた。

出土遺物の内、実測に耐えたものをFig. 59-3-29・30に示す。ともに弥生土器の壺である。29は口縁、30は底部である。30の外面には、縦方向の刷毛目調整が見られる。

この他若干の弥生土器小片が出土した。

弥生時代中期の井戸であろう。



Ph. 59-8 1号井戸（南西より）

(3) 溝状遺構

1号溝

西区を横断する溝である。調査区内で、延長4.6メートル、幅0.75メートルをはかる。底面には、土坑状の凹凸が激しいが、上端の線には乱れなく、溝内部での凹凸と知れる。当初から溝の底面に掘り込みがあったものか、後から掘り込まれたものか明らかではないが、埋土は黒褐色の粘質土で上から下まで変化はない。また、遺物の出土状況を見ると、Ph. 59-9に見るように、底面の凹凸を覆つて広がっており、少なくとも土器が廃棄された段階では既に底面の凹凸が存在し、同時に埋められていったことを示している。なお、水が流れた痕跡は全くなく、区画溝と考えることができる。

埋土の中位から底面にかけて、多量の土器が出土した。特に北東の3分の1の部分に著しく、土器の間に土が混じるといったほどであった(Ph. 59-9)。祭祀土器も混じっていたが、出土状況自体に特に意図的な埋置を思わせるものはなかった。

出土遺物の一部を、Fig. 59-5～Fig. 59-7に示す。Fig. 59-5-1～6は、壺である。1は小型壺で、外面は縱方向の刷毛目調整、内面には指押さえと指なでが横に並ぶ。2は、丹塗り磨研の無頸壺である。口縁の上面には一対の双孔があくはずだが、遺存部分には一孔しか残っていない。3は、丹塗りの袋状口縁壺である。器壁の剥落がひどく、丹塗りは部分的にしか見られない。4は、ひざご形土器である。丹塗りする。5は、鐔状口縁に作る。丹塗りする。6は、壺の胴部である。外面には丹塗りしていいた痕跡がみられる。

7～9は、高坏である。7・8は丹塗りする。8は口縁部を欠くが、おそらく鐔状口縁となろう。10・11は、器台である。指押さえで成形している。脚の筒部内面には、絞り痕跡がみられる。

12・13は、鉢である。ともに器壁は摩滅気味だが、12において特に激しく、調整痕跡は全く残っていない。

14～22は、壺である。口縁を逆L字形につくるもの(14)、水平に近く折り返すもの(15～17)、折り返しがやや浅いもの(18～21)、屈曲の強い「く」字形を呈するもの(22)がある。



Ph. 59-9 1号清北端土器出土状況(西より)



Ph. 59-10 1号溝完掘状況（南より）



Ph. 59-11 1号溝土層断面（南より）

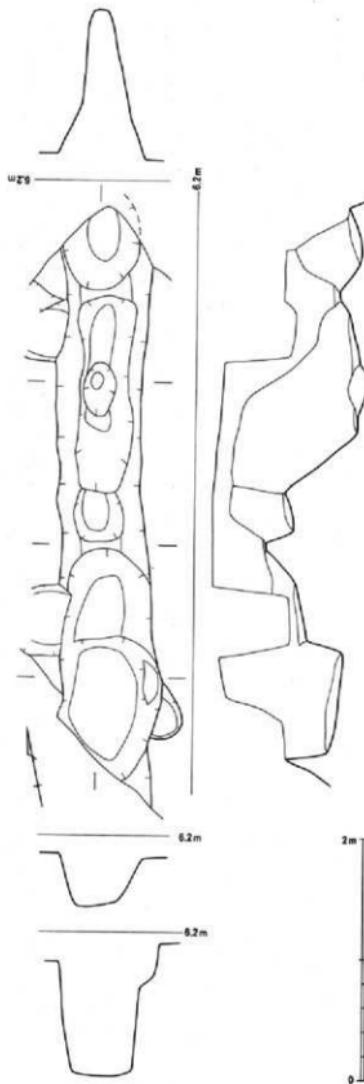


Fig. 59-4 1号溝実測図 (1/40)

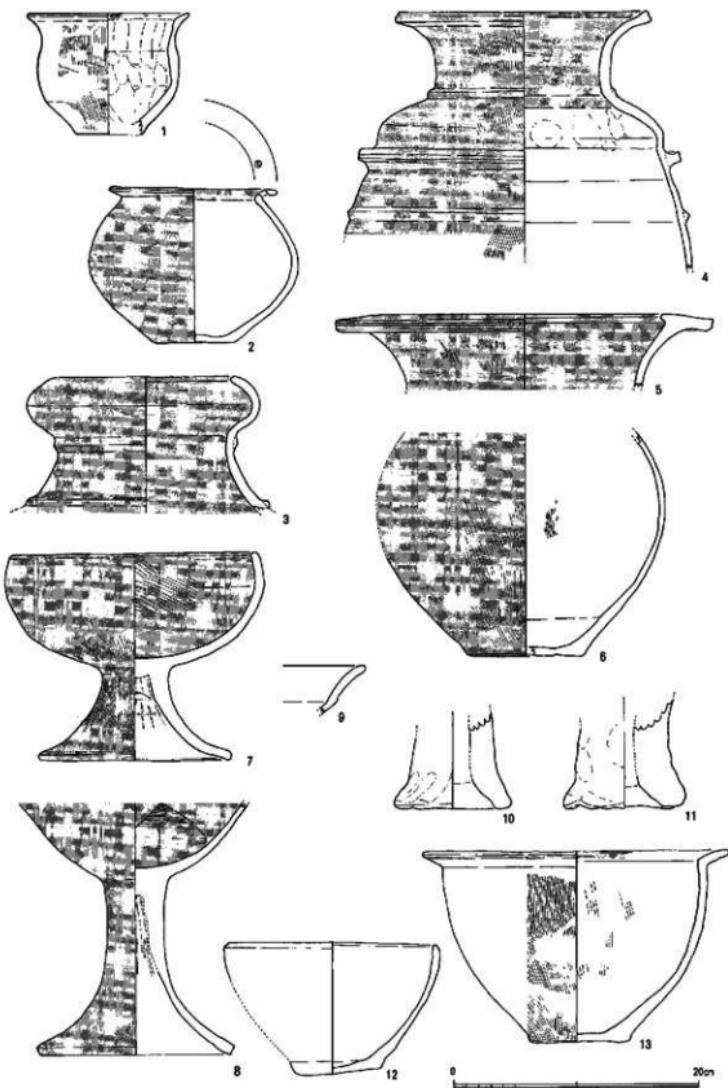


Fig. 59-5 1号清出土遺物実測図 1 (1/4)

23~27は、壺の底部である。23~26は平底、27は丸底に作る。

1、2、4、6~8、10~17、19~21、23~25は、Ph. 59-9に示した土器集中部分から出土した。

このほか、黒曜石の剥片が出土している。

27は、1号溝の北側から出土しているが、明らかに時期的に下る特徴を示しており、混入品と考えるべきであろう。そのほかのすべての出土土器片を検討したが、27の時期を示すものは他に一点もなく、1号溝の時期としては、弥生時代中期後半から後期初頭を当てることができよう。

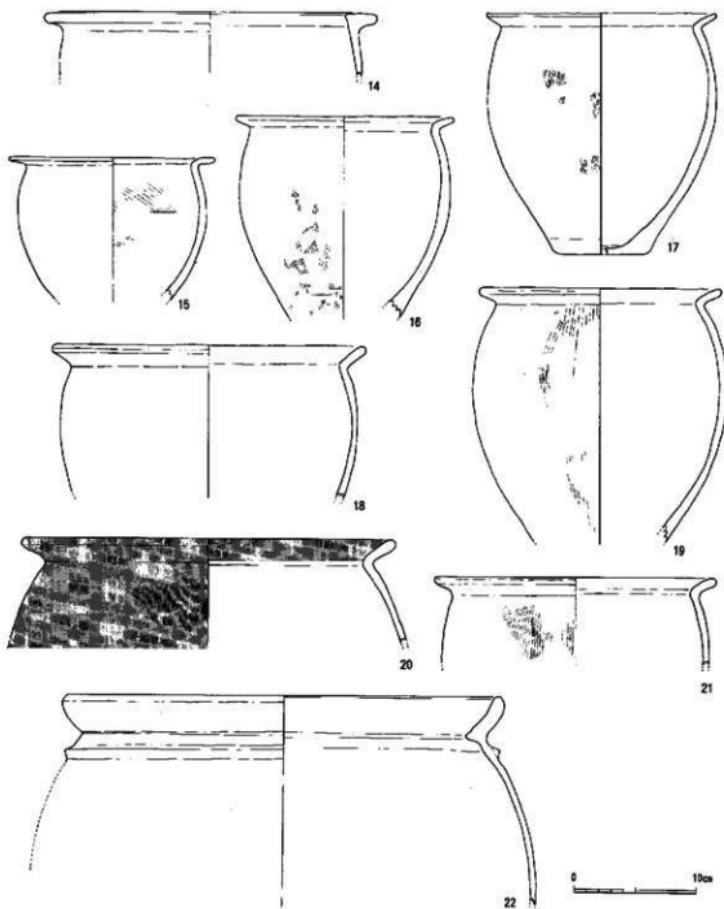


Fig. 59-6 1号溝出土遺物実測図 2 (1/4)

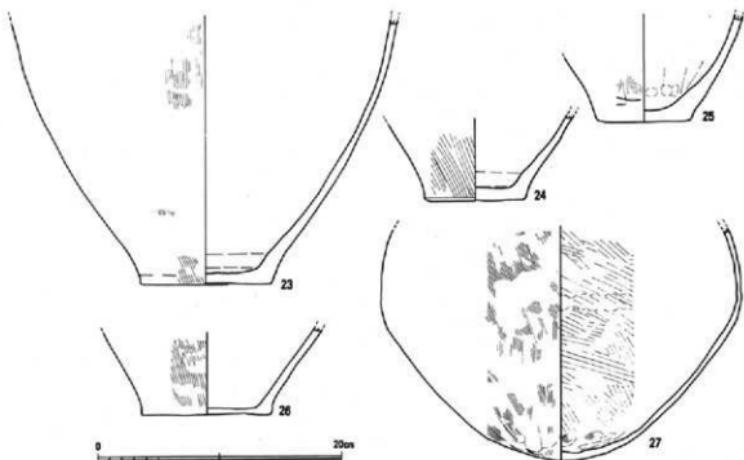


Fig. 59-7 1号溝出土遺物実測図 3 (1/4)



Ph. 59-12 1号溝出土遺物

2号溝

東区を横断して検出した、溝状遺構である。南端が丸くおさまっているようで、溝がここで終わっている可能性も高い。検出した延長は6.3メートル、幅0.6~0.9メートルをはかる。底面には、浅い凹凸がみられ、深さ0.5~0.7センチをはかる。水が流れた形跡ではなく、区画溝と考えられる。

埋土全体から、多量の土器片が出土した。土器はいずれも細かく割れており、意図的に埋置されたものとは考えられない。

Fig. 59-9・10に出土遺物の一部を示す。1は、弥生時代前期の壺の肩部である。沈線で、有輪羽状文を刻む。2は、鉢であろうか。外面に竹管による刺突文と山形沈線文をあしらう。

3~5は、鉢である。3の口縁は、指で薄くつまみ出すため、小さいフリル状を呈する。5は、庄内系鉢である。器壁は摩滅しており、調整痕は残らない。

6・7は、小型丸底壺である。頸部が締まらず、鉢状を呈する。

8~11・14~16は、高坏である。8・9は椭形高坏



Ph. 59-13 2号溝（北より）

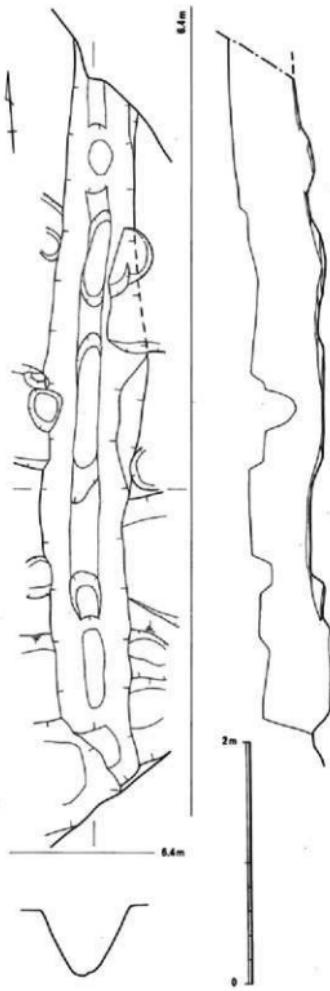


Fig. 59-8 2号溝横断図 (1/40)

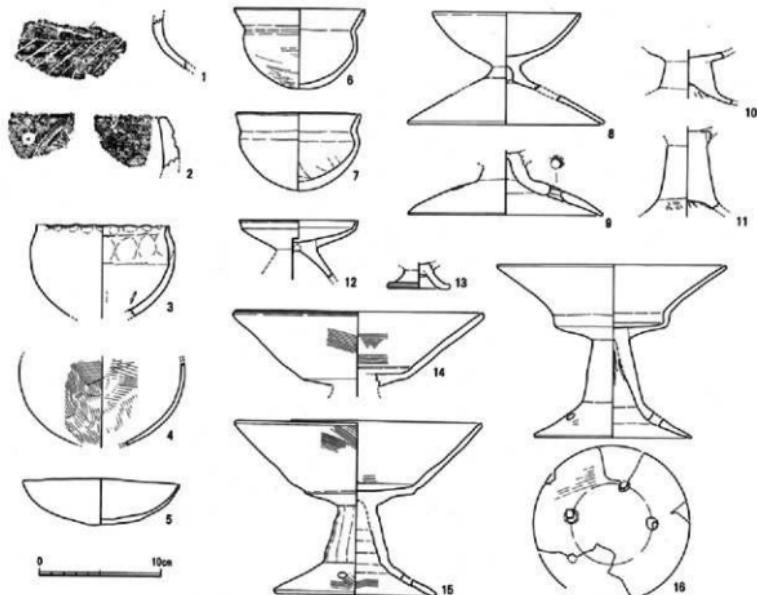
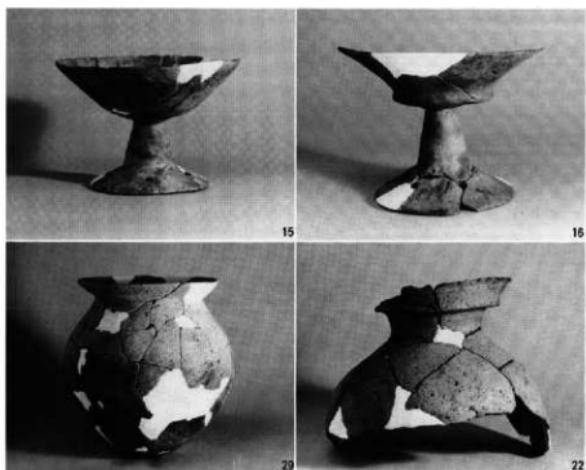


Fig. 59-9 2号清出土遺物実測図 1 (1/4)



Ph. 59-14 2号清出土遺物

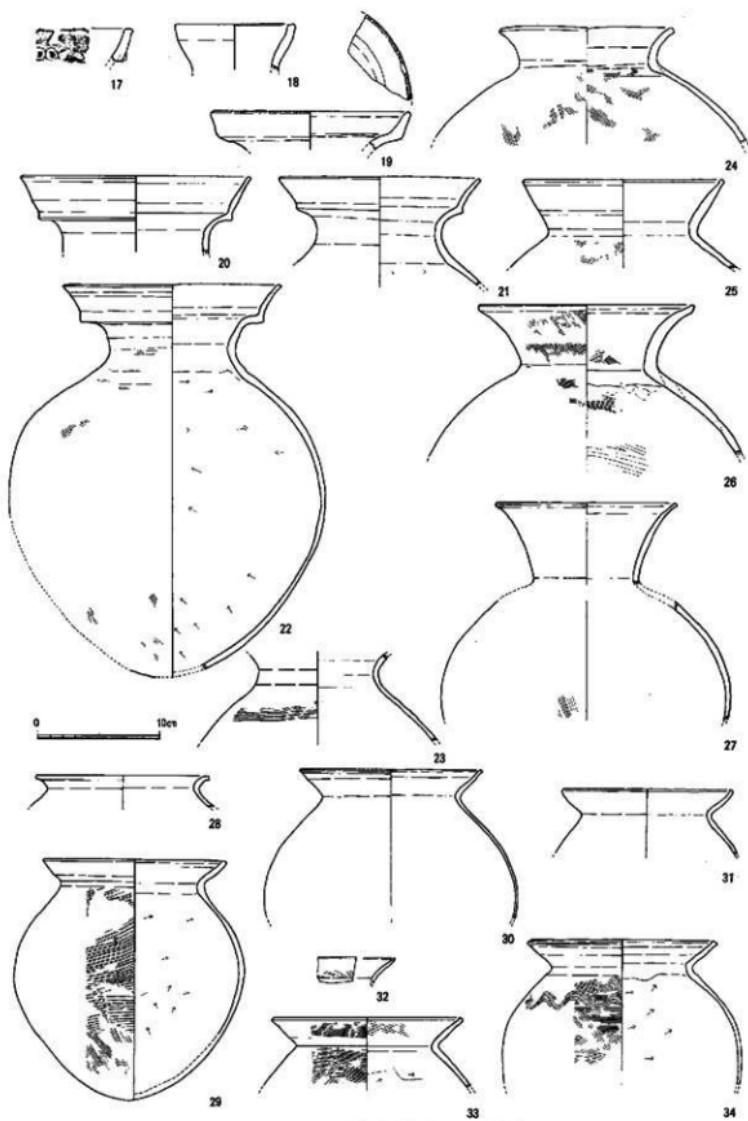


Fig. 59-10 2号溝出土遺物実測図2 (1/4)

である。器壁は摩滅しており、調整痕が残っていない。16は、有段高杯である。これらの高杯は、いずれも外来系に分類されるものである。

12は、器台である。13は、鉢であろうか。脚部の破片のみで、鉢部の形状はわからない。

17~27は、壺である。17は複合口縁部で、円形浮文がみられる。19の口唇部には、細かい刻み目がつく。20~23は、二重口縁壺である。全体を知り得る22で調整を見ると、口縁部は横なで調整、体部外面は刷毛目調整、内面はへら削りである。23の肩部には、櫛描沈線文が巡る。24~27は、外反する直口縁の壺である。器壁は摩滅しており、調整痕が残らないものが多いが、部分的に残る24・26などを見ると内外面ともに刷毛目調整している。28~34は、壺である。29・32・33は、庄内式系である。体部外面は目の細かい叩き調整、内面はへら削りする。34は、布留式系である。体部外面は刷毛目調整、内面はへら削りで、肩部には櫛描波状文を加える。28・30・31は、器壁が摩滅しており、調整痕が残っていない。

これらの出土遺物からみて、古墳時代前期初頭に位置づけるのが妥当であろう。

3号溝

東区の南東壁際で検出した、溝状遺構である。4号土坑などに切られる。しかし、延長部分を明瞭には確認できず、溝であるかどうか確実なところはわからない。

弥生時代中期の壺口縁部破片が出土しているが、時期を推定するには資料不足である。

4号溝

2号土坑と4号土坑とを結ぶような位置で検出した遺構である。平行する細長い上端を検出したので溝状遺構としたが、延長部分がなく、溝と呼ぶことが適当かどうか疑問もある。

弥生時代中期の特徴を示す、壺・壺・器台などが出土している。Fig. 59-3-31に示したのは、朝鮮系無文土器の口縁部破片である。口縁端部からやや外下がりに、突帯を貼り付ける。突帯断面は、下ぶくれの三角形を呈する。器壁はあれており、調整痕は残っていない。32は、壺の肩部である。研磨した器表に、平行した5本の沈線を刻む。

出土遺物からみて、弥生時代中期に属する遺構である。

5号溝

東区の南東壁際から、3号溝と平行して検出した溝状遺構である。一応延長と思われる部分を検出したが、定かではない。

弥生土器と思われる小片が出土しているが、時期を推定するにはいたらない。

(4) その他の遺物

以上の記述の中で報告できなかった遺物について、簡略に紹介する。

Fig. 59-11-1は、二重口縁壺の口縁部分と思われる。ただし、下方に張り出した端部は緩く弧を描いており、これが亞によるものでないとすれば、全く違う器形の部位である可能性もある。櫛描波状文と竹管による刺突文が施されている。器壁は全体に剥離気味で、調整痕跡は残っていない。

2~4は、石包丁である。小豆色の輝緑凝灰岩を用いたものである。4では、両面から穿孔しその面が臼状を呈するが、2は直線的に小さく穿孔されている。

5は、石斧である。薄く割った石材を研磨しており、厚さは1センチに満たない。実測図の右側の例

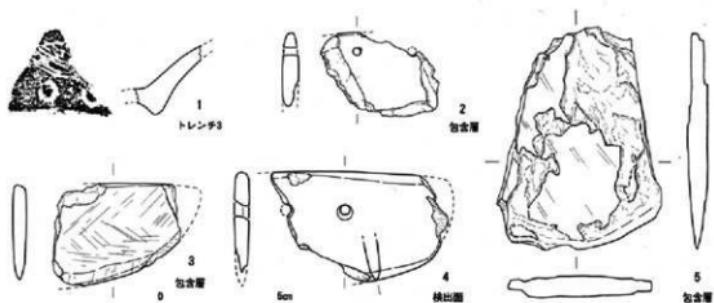
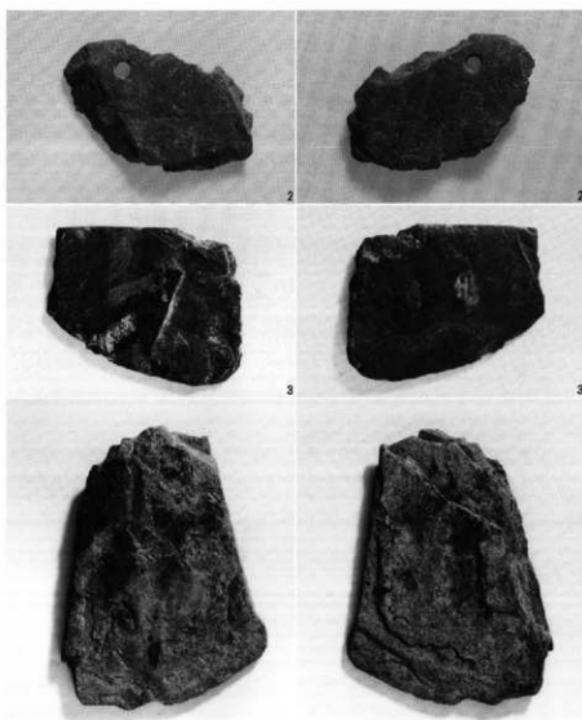


Fig. 59-11 その他の出土遺物実測図 (1/2)



Ph. 59-15 その他の出土遺物

縁は生きており、基部から刃先に向かって広がる形態が推定できる。

第3章 小 結

第59次調査では、土坑6基、井戸1基、柱穴48基、溝状遺構5条を検出した。堅穴住居跡は確認できなかったが、堅穴住居跡を思わせる落ち込みはみられた(SX01～SX04)。柱穴から掘立柱建物等を復元することはできなかった。

これらの遺構を時期別に整理すると次のようになる。

弥生時代中期	1号井戸、4号溝
中期前半	5号土坑
中期中頃	2号土坑
中期後半から後期初頭	1号溝
後期	1号土坑、3号土坑
後期前半	4号土坑、SX01、SX02、SX03、SX04

古墳時代初頭(弥生時代終末～) 2号溝

弥生時代中期から後期の遺構は、第56次調査地点を西端として東に続く当該期集落の一部に含まれると見える。居住施設を示す遺構は明瞭には検出できなかったが、廃棄土坑と思われる遺構が分布し、井戸が掘られるなど、生活空間の一角を占めたことは疑いない。

古墳時代に下る遺構は、2号溝のみであった。2号溝は、非常に直線的な溝で、埋土からみても排水機能を負っていたものとは考えられず、何らかの区画のための溝であることは間違いないだろう。周辺の調査成果を見ると、本調査地点の西に位置する第54次調査・第56次調査では、弥生時代後期後半以後の遺構は報告されていない。一方、本調査地点の東側では、第5次調査・第20次調査を始め、古墳時代の遺構は多く報告されている。これらの状況を見ると、本調査地点の2号溝は古墳時代前期の遺構分布の西端を画していた可能性が考えられる。

今回の第59次調査地点は、擾乱部分の面積が広く、また削平もあり、遺構の遺存状況は好ましいものではなかった。特に、遺構を検出し得た面積が狭かったことは、調査成果を評価する上で大きな障害となっている。本報告では、資料整理が終わっていないこともあって、十分な検討が加えられなかつた。いずれ、未報告である第5次調査の報告や周辺の更なる発掘調査成果の蓄積を待って、再考を期したい。

第 60 次 調 査

例　　言

1. 本章は、共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、比恵遺跡群第60次調査（福岡市博多区博多駅南5丁目89、89-3）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭・折茂由利・梅本洋平（國學院大學）が作成し、折茂由利が斎書した。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・井上涼子・上塘貴代子・大浜菜緒・大庭康時が作成し、森本・井上・上塘・折茂が斎書した。
6. 遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・岡山良子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・小田麻美子・深田みどりがあたった。
8. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

本　文　目　次

第1章 はじめに	29
1. 発掘調査にいたる経過	29
2. 発掘調査の組織と構成	29
3. 周辺の調査成果	30
第2章 発掘調査の記録	31
1. 発掘調査の概要	31
2. 遺構と遺物	33
(1) 竪穴住居跡	33
1号竪穴住居跡 …33 2号竪穴住居跡 …35 3号竪穴住居跡 …38	
(2) 土坑	39
6号土坑 ……39 28号土坑 ……40	
(3) 井戸	40
1号井戸 ……41 2号井戸 ……41 3号井戸 ……43	
4号井戸 ……45 5号井戸 ……45	
(4) 墓葬遺構	48
1号甕棺墓 ……48 2号甕棺墓 ……50 3号甕棺墓 ……52	
4号甕棺墓 ……53 5号甕棺墓 ……57 6号甕棺墓 ……57	
7号甕棺墓 ……58 1号土壙墓 ……58 2号土壙墓 ……59	
(5) その他の遺構と遺物	60
第3章 小結	62

第1章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

平成8年12月4日、イーグル化粧品株式会社代表取締役坂田敏幸氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区博多駅南5丁目89、89-3にかかる埋蔵文化財事前調査願いが提出された。申請地は、弥生時代の集落遺跡として著名な比恵遺跡群に含まれていた。さらに、南には6世紀後半から7世紀前半の柵状遺構と倉庫群が発掘され、「那津官家」の可能性が論じられた比恵遺跡群第8次調査地点が隣接している。そこで、事前調査願いを受け付けた埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要であると判断し、同日その旨を回答した。

試掘調査は、12月10日に実施した。その結果、現地表下15~30センチの鳥居ローム面で遺構を検出した。この結果を受けた埋蔵文化財課では、開発計画が10階建て共同住宅の建設であり、遺構が破壊されることは避けられないことから、発掘調査は不可欠であると言う方針で、イーグル化粧品株式会社と協議を重ねた。そして、翌平成9年1月20日より発掘調査を実施することで同意を見た。発掘調査には、11月29日まで博多区中呂服町で博多遺跡群第100次調査を担当し、その後資料整理・報告書作成に入っていた大庭康時があたることとなった。

ところが、平成9年1月16日に現地での最終打ち合わせを行ったところ、申請地内に祭られていた地蔵尊の移転が1月24日であり、それまでは調査にとりかかれないことが判明した。この地蔵尊は、申請地のほぼ中央に、地域の住民によって祭られてきたもので、その移転に先行して表土剥ぎの重機を入れることは、物理的に不可能な状況であった。やむを得ず調査日程は延期し、同27日バックホーによる表土剥削、28日調査機材を搬入し、発掘調査に着手した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	イーグル化粧品株式会社	代表取締役	坂田 敏幸
調査受託	福岡市長		桑原 敬一
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊
調査統括	同 埋蔵文化財課	課長	荒巻 輝勝
	同	第二係長	山口 讓治
調査庶務	同	第一係	西田 結香(前任) 河野 淳美(現任)
調査担当	同	第二係	大庭 康時
調査作業	梅本洋平(國學院大学) 石川君子 井口正愛 江越初代 大久保五枝 大久保学 折茂由利 河野恒子 清水明 杉山正孝 関加代子 曾根崎昭子 都野浩之 永瀬和代 長田嘉造 能丸勢津子 野口ミヨ 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 吉田清		

3. 周辺の調査成果

第60次調査地点の西に面した道路では第3次調査が、南に接するテニスコートでは第8次調査が実施されている。以下、その概要を記す。

第3次調査（1966～1968年）

1964年から1966年にかけて施工された県道博多駅～竹下線の拡幅工事にともなって行われた。また、それ以降にも、1967年と1969年に断続的に観察調査の形で行われている。

縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての貯蔵穴8基、弥生時代中期の甕棺墓2基、溝状遺構などが確認された。

筑紫野古代史研究会「見捨てられた春住遺跡－縄文晚期終末へのアプローチ」『筑紫野古代史研究会会報第2集』1977年

第8次調査（1984年）

社宅建設にともなって、発掘調査を実施した。

弥生時代前期の貯蔵穴、中期初頭～後葉の甕棺墓、中期末～後期後葉の住居跡・井戸、古墳時代前期～後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを検出した。最も注目されるのは、集落廃絶後6世紀後半から7世紀前半に営まれた倉庫群と柵状遺構であり、「那津官家」との関わりが推定されている。

柳沢一男『比恵遺跡第8次調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集 1985年

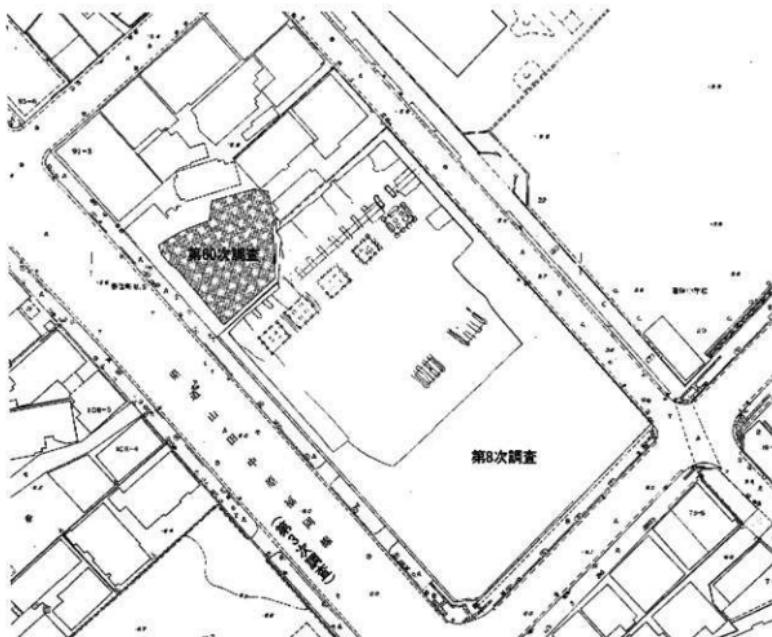


Fig. 60-1 第60次調査地点位置図 (1/1000)

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

発掘調査には、1997年1月27日の表土掘削より着手した。表土は、バラスと二次堆積した包含層とからなる。表土掘削にはバックホーを用い、鳥栖ローム層面を完全に露出させた深さまで除去した。この表土部分は、西側ではきわめて薄く、バラスが直にローム面に食い込んだ状況すら見られた。表土が厚い調査区東側部分でも、現地表下30センチ程度でローム面となる。これは、比恵遺跡群発見のきっかけにもなった、かつての区画整理によるものである。なお、第3次調査の原因である道路工事によって、調査地前面の道路および歩道は、遺構検出面よりも深く切り下げられている。

発掘調査は、残土搬出ができなかった関係で、南と北に分けて打って返しで行った。特に西半分において既存建物の基礎による搅乱がみられたが、東半分には搅乱はほとんど見られなかった。遺構の遺存状態は、区画整理による削平を受けているため良好とは言えないが、削平のため消滅した遺構は少ないとと思われ、多くの遺構を調査することができた。ちなみに、第8次調査の概報では、壇棺の遺存状態から30センチ程度の削平があったものと推定している。

弥生時代の竪穴住居跡・土坑・井戸・壇棺墓・土塚墓、古墳時代の土坑、奈良時代の溝状遺構、中世の井戸などを検出した。奈良時代の溝状遺構は、第8次調査地点から続いているのである。また、第8次調査地点で検出された溝状遺構や倉庫群に関連する遺構は、全く検出されなかった。この他、多数の柱穴を検出ましたが、掘立柱建物を抽出するにはいたらなかった。

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器などコンテナ36箱、黒曜石剥片・石斧片・石剣片などの石製品がコンテナ1箱出土している。

発掘調査は、3月31日の埋め戻しをもって終了した。



Ph. 60-1 第1区全景（北西より）

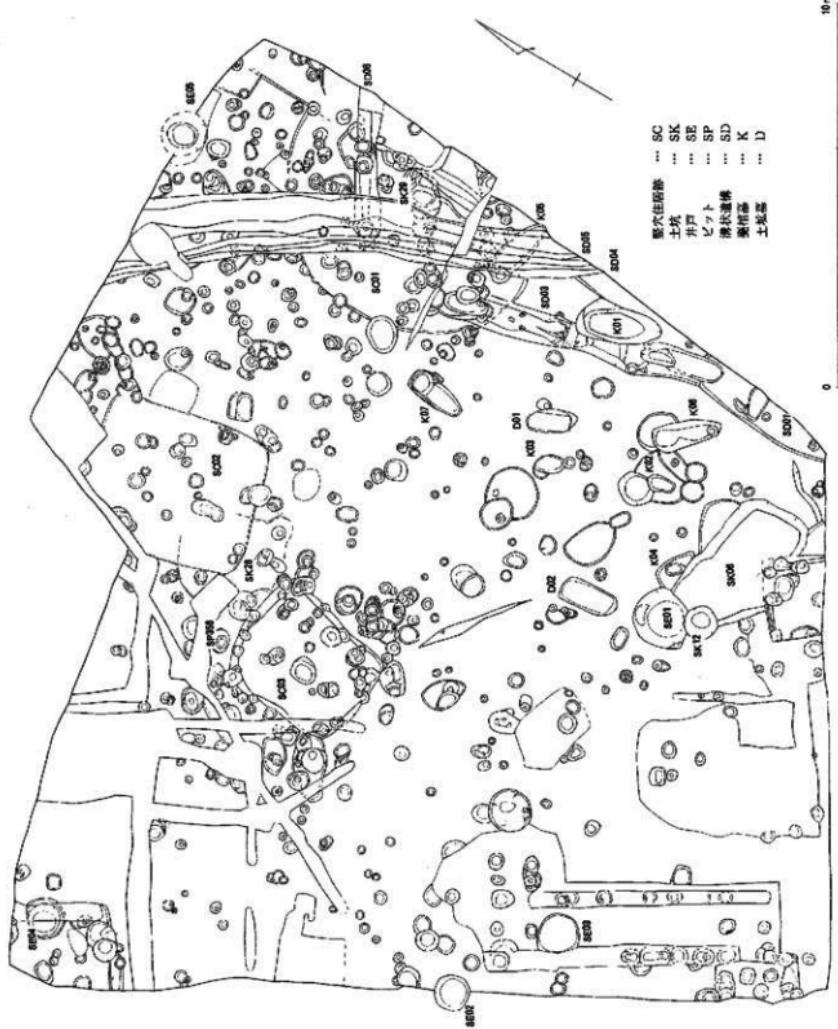


Fig. 60-2 遺構全体図 (1/125)

2. 遺構と遺物

以下、第60次調査で検出の遺構・遺物について、遺構の種別にそって報告する。なお、時間的な割合から未だ完全な整理は終了しておらず、すべての遺構について詳述する訳には行かなかったことを、あらかじめ断っておきたい。なお、以下の記述において、見出しの遺構名の後に括弧で示した記号は、調査段階での遺構記号である。遺物の取り上げ・写真・実測図等の記録は、すべてこの遺構記号によっている。

(1) 穫穴住居跡

第60次調査では、弥生時代の竪穴住居跡3棟を検出した。円形住居跡1棟、方形住居跡2棟である。

1号竪穴住居跡 (SC-01)

北区と南区とにまたがって検出した竪穴住居跡である。直径7.4メートルの、ややいびつな円形を呈する。検出面から床面までの深さは、30センチ以下をはかる。

円形プランのほぼ中央には、長辺約100センチ、短辺約70センチのほぼ長方形の土坑が掘られている。土坑の両側には、これに接して柱穴状のピットがみられる。いわゆる「松葉型」プランといえよう。柱穴は、中心から1.8~2.2メートル離れて円形に巡る。

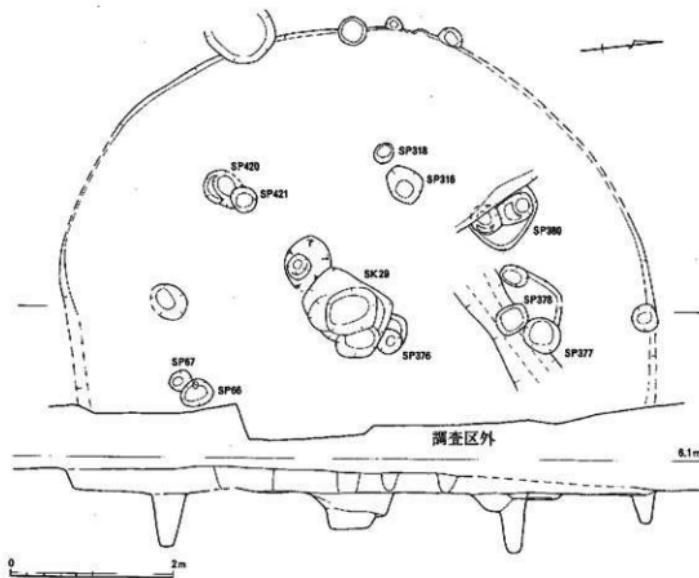


Fig. 60-3 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



Ph. 60-2 1号竪穴住居跡（南より）

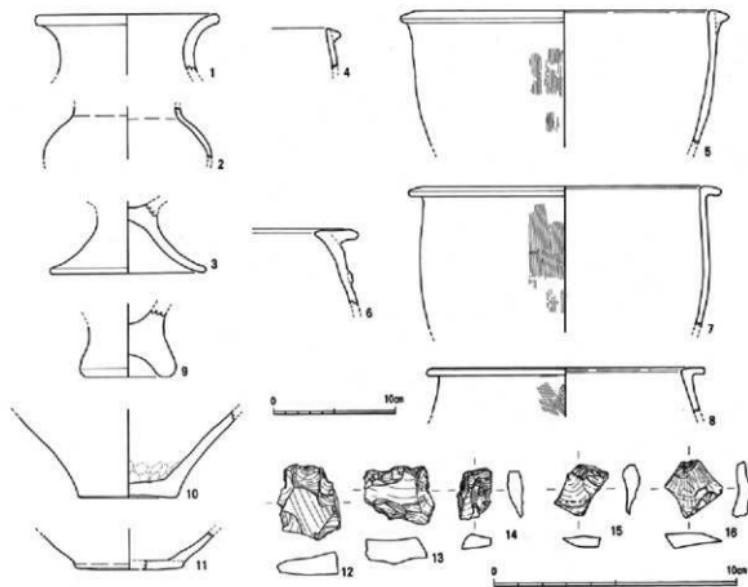


Fig. 60-4 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1~11…1/4、12~16…1/2)

出土遺物の一部を、Fig. 60-4に示す。1・2は、壺である。内外面とも器壁が荒れていて、調整痕は認められない。3は、台付きの鉢であろう。4～8は、甕である。4・5は、内湾気味に直行した口縁の外側に、断面三角形の突帯を貼り付ける。調整痕の残る5によれば、内面から口縁外面はなで調整、体部外面は継に刷毛目調整する。6は、内湾した口縁の外側に長く粘土を貼り付け、鉗状の口縁を作る。口縁の下には、断面M字形の突帯を設ける。7・8は、逆L字形の口縁である。内面はなで調整、外面は刷毛目調整する。9～11は、底部である。9は甕、他は壺であろう。12～16は、黒曜石の剥片である。

弥生時代中期前半と考えられる。

2号竪穴住居跡 (SC-02)

調査区北辺の中央付近で検出した、竪穴住居跡である。長辺4.3メートル、短辺

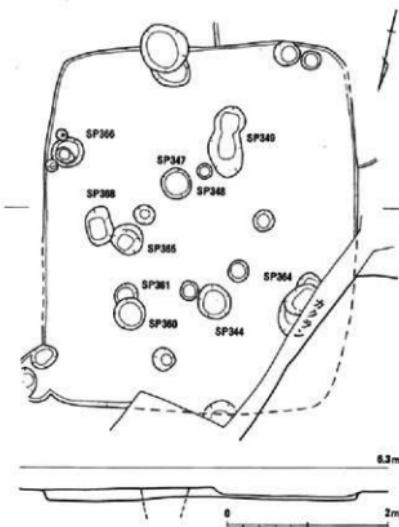


Fig. 60-5 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



Ph. 60-3 2号竪穴住居跡 (北西より)

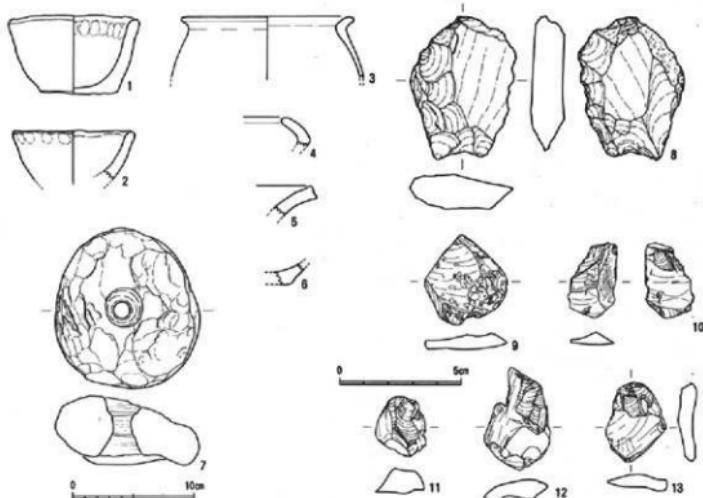
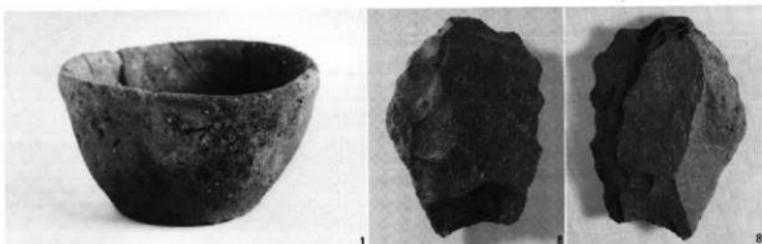


Fig. 60-6 2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1~7…1/4, 8~13…1/2)



Ph. 60-4 2号竪穴住居跡出土遺物

3.5メートルの長方形を呈し、検出面からの深さは20センチ前後をはかる。

主柱穴は、確認はできなかった。また、東壁際から鉢形土器と環状石錐が出土した(Ph. 60-5)。この両者に挟まれた366号ピットとの関係は明らかではないが、意図的に置かれたものであることは間違いないだろう。なお、鉢は口縁を下に向けて伏せてあつた。

出土遺物の一部を、Fig. 60-6に示す。1・2は、鉢である。1は、東壁際に置かれていたもので、完



Ph. 60-5 2号竪穴住居跡出土遺物出土状況 (北より)

形品である。体部から底部の内面はなで調整、口縁の内面は指押さえ、体部外面には手捏ねの掌紋や指押さえ痕跡が認められる。2の調整も、おおむね1と同様である。3・4は、壺である。3は、無頸壺で、口縁は短く外方に折り返す。器壁が荒れており、調整痕跡は残っていない。

4は、袋状口縁壺の口縁部である。袋状部分は、丸みを保っているが、屈折部にわずかに後が付いている。5は、壺の口縁部であろう。全体に器壁が荒れているが、内面にはわずかに横方向の刷毛目がうかがえる。6は、底部である。平底に作るが、底部の端は丸みを帯びている。7は、東壁際から出土した環状石錐である。安山岩製で、前面を叩打によって成形しており、削りは一切見られない。中央の孔は、両側から回転穿孔される。9～13は、黒曜石の剥片である。

出土土器、特に袋状口縁や底部の特徴から、弥生時代後期前葉の竪穴住居跡と推定される。

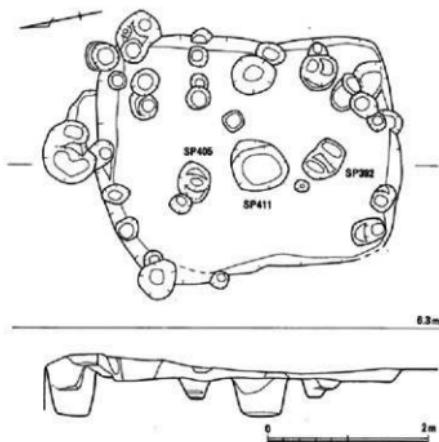


Fig. 60-7 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



Ph. 60-6 3号竪穴住居跡 (南東より)

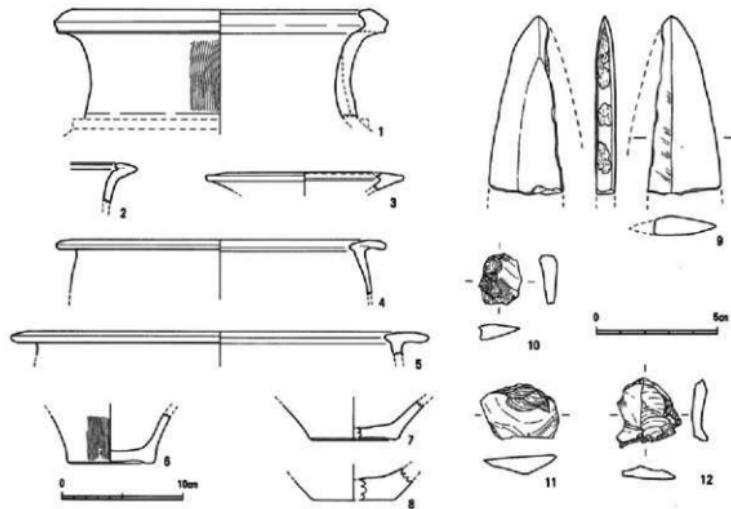


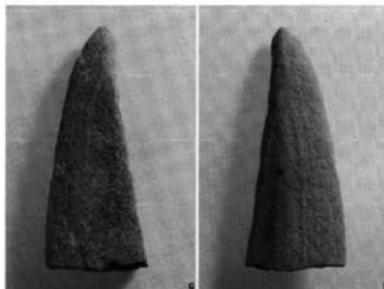
Fig. 60-8 3号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1~8…1/4, 9~12…1/2)

3号竪穴住居跡 (SC-03)

調査区中央部のやや北寄りから検出した竪穴住居跡である。長辺3.5メートル、短辺2.6~3.0メートルの長方形を呈する。検出面から床面までの深さは、8~30センチをはかる。

主柱孔は特定できなかつたが、一応、中央の土坑(411号ピット)と、その両側の柱穴(392・405号ピット)が本住居跡に伴うものと考えている。

出土遺物の一部を、Fig. 60-8に示す。1・2は、壺である。1は、直立口縁に立ち上がった頸部を鋭く外反させた端部の内側に、粘土帯を貼り付け、外傾した錐状に肥厚させる。内面から口縁部の外面まではなで調整、頸部外面は縦方向の刷毛目調整する。なお、頸部の下端は、横方向になだらせており、この直下に突起が貼り付けられていたことを示している。2も口縁端部に粘土帯を貼り付け、錐状に作る。3は、錐状口縁の高壺であろうか。あるいは、壺の口縁かもしれない。4・5は、壺である。粘土帯を貼り付け、逆L字状口縁に作る。器壁は荒れていて、調整痕跡は残っていない。6~8は、底部である。6は壺である。内面はなで調整、外面は縦刷毛調整する。7・8は、壺の底部であろうか。器壁は荒れ調整痕は見られない。9は、磨製石剣の切先である。頁岩製である。片面の中央には錫が通るが、他面は中央まで研ぎ出さず、平坦面を設けている。なお、一方の側縁を欠くが、この破面は平に研ぎ潰されており、転用を



Ph. 60-7 3号竪穴住居跡出土遺物

図っていたことがうかがわれる。ただし、何に転用しようとしていたのかは、この遺存部位からは不明である。10~12は、黒曜石の剥片である。

これらの出土遺物から、弥生時代中期後半の堅穴住居跡と考えられる。

(2) 土坑

第60次調査で、発掘調査時に土坑として番号を付けた遺構は、31基にのぼる。

ただし、これには井戸、墓塚、土壙塚なども含まれており、これらについては、各項目で説明する。

6号土坑 (SK-06)

調査区南辺近くで検出した大型土坑である。搅乱と1号井戸に切られ、全形は

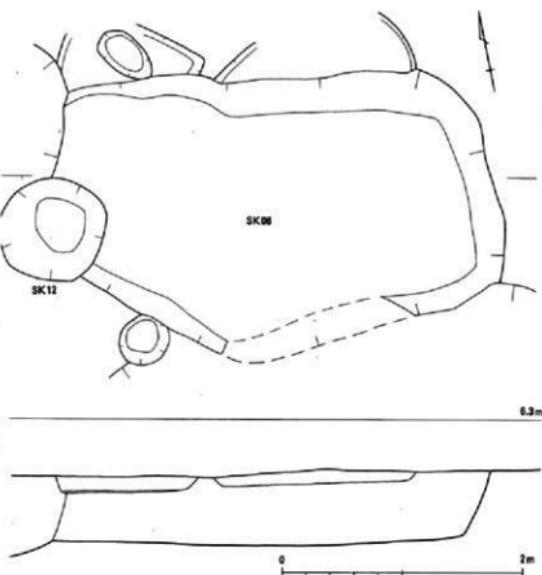
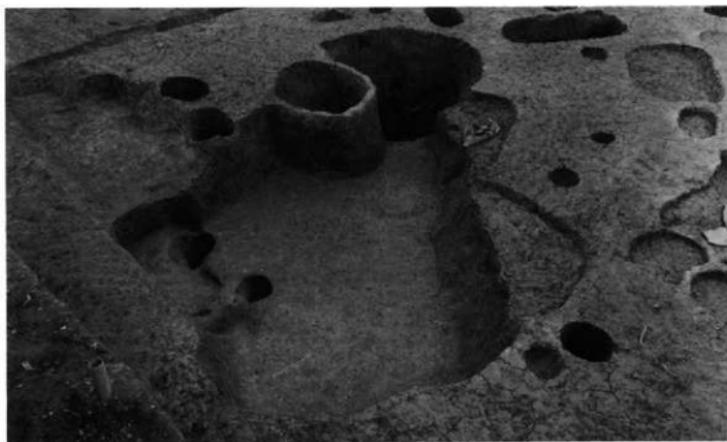


Fig. 60-9 6号土坑実測図 (1/40)



Ph. 60-8 6号土坑 (東より)

知り得ない。横に長い五角形を呈するようで、底辺にあたる北壁は、長さ3.3メートル以上を図る。また、各壁は急角度で立ち上がっており、床面はほぼ平坦となる。検出面から床面までの深さは、60センチ前後である。

弥生土器の小片が、若干出土しているのみで、時期を判断する根拠に欠ける。遺構の重複からみて、後述する4号堅棺墓（中期前半）よりも古いことは明かである。隣接する第8次調査の概要報告書では、貯蔵穴を三種に大別し、1類として「長方形プランで壁面が垂直もしくはやや外傾ぎみに立ち上がるるもの」を上げている。6号土坑は、形態的には、この1類に近い。1類は、夜臼系土器を含む板付1式期に限定されると言う。

28号土坑（SK-28）

2号堅穴住居跡と3号堅穴住居跡の間で検出した、浅い土坑である。一辺2.5~2.8メートルのほぼ方形を呈し、両堅穴住居跡を切っていた。床面はほぼ平で、検出面からの深さは、8センチ前後をはかる。掘り込みの浅さが、遺存状態の悪さを示すものと見れば、堅穴住居跡と見なすこと也可能である。この場合、いさか狭い感はあるが、壁際に付設されたベッド部分が削平で失われたものとすれ

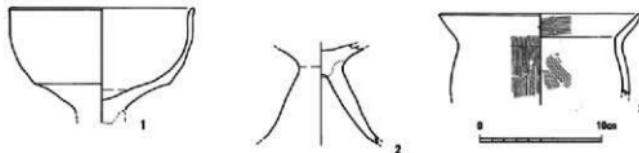


Fig. 60-10 28号土坑出土遺物実測図 (1/4)

ば、決して狭すぎるものとはならない。ただ、そうしたところで、主柱穴を特定できたわけでもなく、想像の域を出ないので、あくまで土坑として報告しておきたい。

Fig. 60-10に、出土遺物の一部を示す。すべて、古式土師器である。1・2は、高杯である。杯部と脚部で別個体だが、同タイプになろう。3は、甕である。口縁部の外面は横なで調整だが、他の部位は刷毛目調整である。

古墳時代前期の遺構であろう。

(3) 井戸

今回の発掘調査では、弥生時代4基、中世1基の井戸を検出した。弥生時代の井戸は、調査区南辺から



Ph. 60-9 1号井戸 (南より)

西辺付近に、中世の井戸は北辺に分布している。いずれも素掘りの井戸である。

1号井戸 (SK-13)

調査区南辺近く、前述の6号土坑を切って検出した井戸である。直径1.4~1.55メートルの略円形を呈し、検出面から底面までの深さは約1.4メートルをはかる。壁は、ほぼ直立している。

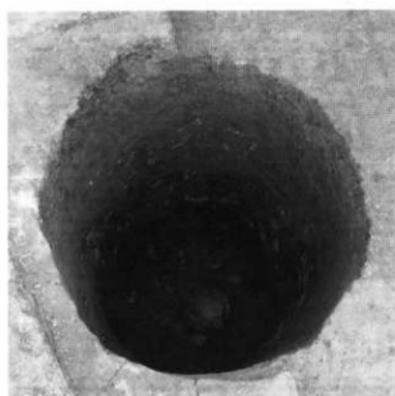
弥生時代中期中頃の土器が出土している。

2号井戸 (SK-22)

調査区西辺にかかるて検出した井戸である。直径95センチ前後の円形を呈し、検出面からの深さ



Ph. 60-10 2号井戸（北東より）



Ph. 60-11 2号井戸実掘状況（南より）

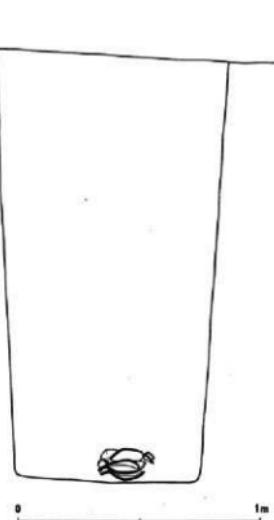
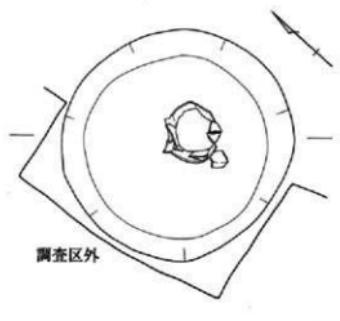


Fig. 60-11 2号井戸実測図 (1/20)

は1.75メートルをはかる。壁は、ほぼ直立している。

埋土中位と床面直上から、弥生土器が出土した。Fig. 60-12の1~4・6は埋土中位から出土したもので、同一レベルで一面に重なって埋め込まれていた。井戸の埋立をいったん中断してこれらの土器を廃棄し、再び一気に埋め立てた様子が推測できる。5は、床面直上から出土した土器である。床面の

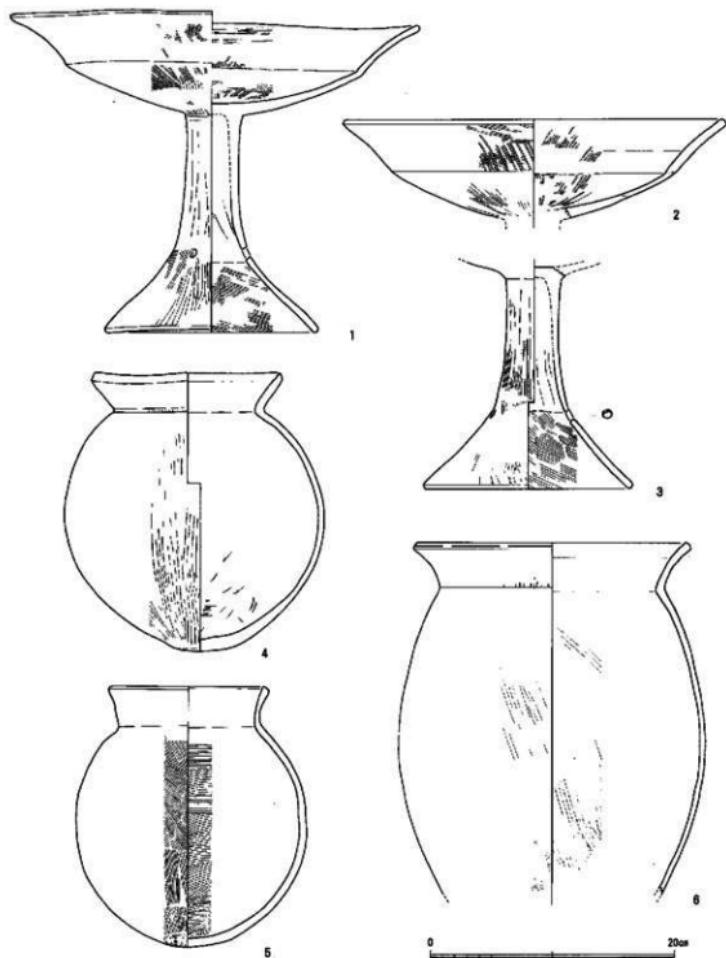


Fig. 60-12 2号井戸出土遺物実測図 (1/4)



Ph. 60-12 2号井戸出土遺物

中央部に破片を重ね合わせて置かれていた。

1~3は、高坏である。坏部の内外面は、刷毛目の上に放射状の暗文が施される。脚の裾部は、縦方向にへら磨きされる。4~6は、甕である。4は、丸底気味ではあるが小さな底部を作る。体部内面から口縁部はなで調整、体部外表面は刷毛目調整する。5は、丸底である。頸部から口縁部はなで調整、体部は刷毛目調整する。6は長胴で、「く」字形に長く外反する口縁を持つ。摩耗しており、体部内面に部分的に刷毛目調整が残るのみである。

弥生時代終末期頃の井戸と思われる。



Ph. 60-13 3号井戸出土遺物

3号井戸 (SK-23)

2号井戸の2メートルほど南東で、大きな搅乱坑の下から検出した井戸である。直径約1.15メートルの円形を呈する。搅乱坑の床面からの深さは48



Ph. 60-14 3号井戸（西より）

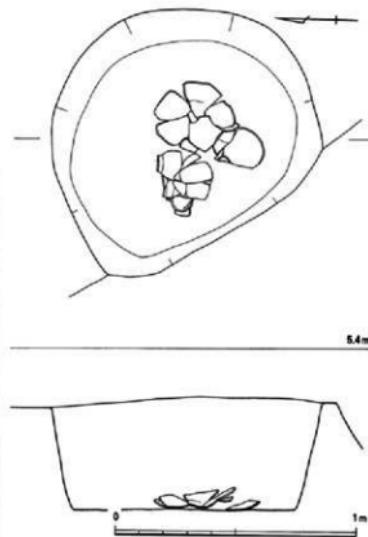


Fig. 60-13 3号井戸実測図 (1/20)

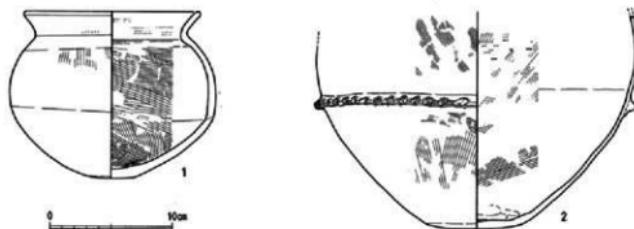
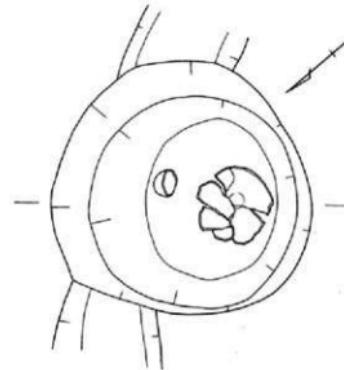


Fig. 60-14 3号井戸出土遺物実測図 (1/4)

センチをはかるが、井戸底面の標高では、2号井戸とほぼ同じレベルとなる。

床面中央付近から、弥生土器が土圧で潰された状態で出土した。

Fig. 60-14-1は、壺である。丸底気味ではあるが、小さな底部を作る。体部内面は刷毛目調整痕がはっきりと残る。口縁部から体部外表面は摩耗気味で、調整痕がはっきりしないが、口縁の内面は横刷毛調整、口縁部外表面から体部外表面は、縱刷毛調整である。2は、大型壺の胴部であろう。平底気味の底部を作る。胴部の張り出した部位からやや下がった位置に、刻み目突帯を巡らす。内外面とも刷毛目調整で、底部内面は指押さえする。なお、この土器は、前述の2号井戸出土の破片と接合できている。



Ph. 60-15 4号井戸 (北西より)

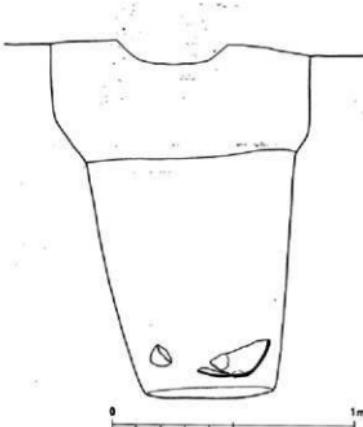


Fig. 60-15 4号井戸実測図 (1/20)

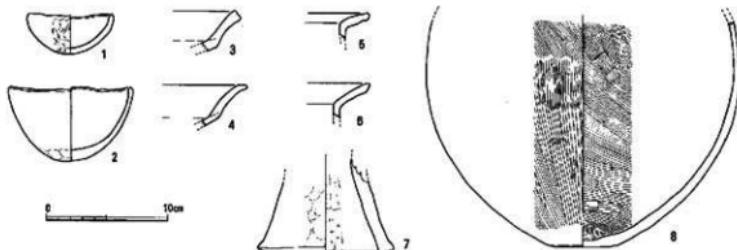


Fig. 60-16 4号井戸出土遺物実測図 (1/4)

土器の接合関係からみて、2号井戸と3号井戸はほぼ同時期に存在した可能性が高い。したがって、3号井戸も弥生時代終末期に属すると考えられよう。

4号井戸 (SK-27)

調査区の北西角付近で検出した井戸である。直径105~110センチの略円形を呈する。壁は、検出面からの深さ50センチ付近で二段掘り状にその幅を狭める。床面は、検出面からの深さ1.5メートル弱をはかる。掘り形が二段掘り状を呈した結果、東側の壁で傾斜が緩く、西側で急に立ち上がっている。

床面から8~13センチほど浮いて、鉢 (Fig. 60-16-2) と壺の胴部 (Fig. 60-16-8) が埋め込まれていた。鉢は完形品であり、また壺の胴部も正立して置かれるなど、床面からやや浮いてはいるものの、意図的に埋置されたことを示している。

出土遺物の一部を、Fig. 60-16に示す。1・2は、小型の鉢である。いずれも内面はなで調整で平滑に仕上げ、外面は指押さえで成形している。1はほぼ丸底と言えるが、2は底部を若干肥厚させ、小さな底部を作っている。3・4は、高杯の口縁部である。いずれも浅い皿状の体部の端に粘土帯を貼り付け、外反して大きく開く口縁部を作っている。3では口縁端部を直角に面取りして角張らせているのに対し、4では、薄く外方に引き出し、むしろ口縁上面にわずかな平坦面を作っている点が異なる。ともに器盤は摩滅しており、調整痕跡は認められない。5・6は、壺の口縁部である。「く」字形に折り返した口縁を作る。口縁の上面は、横方向の刷毛目調整、外面は横なで調整する。7は、器台の脚部である。内面の上半は指によるなで上げ、下半は横方向へのら削りである。外面は、器壁が荒れていて、調整痕が残っていない。8は、大型の壺の胴部である。底部は、やや丸みを示しながらも平底に作っている。内外面ともに、刷毛目調整をする。

これらの出土遺物からみて、弥生時代後期前半の井戸と考えられる。

5号井戸 (SK-31)

調査区の北辺に、半分がかかって検出した井戸である。丁度この部分に搅乱がかかっていたのと、半分が調査区外であったことで、遺構としての確認が遅れた。当初は、深い搅乱坑という認識で掘り下げていたが、掘り下げた壁の形状を見るに及んで認識を改め、この部分だけ調査区を拡大し、調査したという経緯を持つ。

直径約125センチの円形を呈し、検出面から井戸底面までの深さは1.75メートルをはかる。壁は、深さ1~1.1メートル付近で傾斜を変え、下部はほぼ直に、上部はやや開き気味に立ち上がる。

特筆すべき出土状況を示す遺物はなかったが、埋土中から若干の土器・陶磁器が出土している。出土遺物の内、図化に耐えたものをFig. 60-18に示した。1~3は、土師器である。1・2は皿で、底部は斂切りする。内底部に静止なで調整を加え、外底部には板目压痕が見られる。口径・器高は、それぞれ9.4・1.2、9.4・1.4センチをはかる。3は、丸底壺と思われるが、あるいは碗かも知れない。外面は横なで調整、内面は横なでの後て当て調整で平滑に仕上げる。口径は、15.4センチをはかる。4~7は、黒色土器B類の碗である。いずれも内外面とも磨滅し、調整痕跡が残らない。ただし、7の内面には、わずかに笠磨きが認められる。器形としては、深碗で、底径が小さくハの字形に外方に踏張った高台が付く。高台端部は、外側に丸く肥厚している。8は、黒色土器A類の碗である。内外面とも器壁が荒れ、調整痕跡が残らない。内面のみ炭素が吸着し、漆黒色を呈している。高台は、径が若干広めで、やや外側に開くもののほぼ直立している。

9・10は、白磁である。9は、皿の口縁部であろう。10は碗で、高台付近は露胎となる。11は、高温の須恵質陶器である。口縁は、大きく外反する。内外面とも、横なで調整する。胎土は、きわめて肌理細かく精良で赤褐色、器壁表面で暗灰色を呈する。

12は、平瓦片である。上面は綱目、下面はけずり痕が見られる。下端は、斂削りされる。桶巻き作りと考えられる。須恵質がかった瓦質に焼成されている。

これらの出土遺物から、11世紀後半の井戸と考えられる。

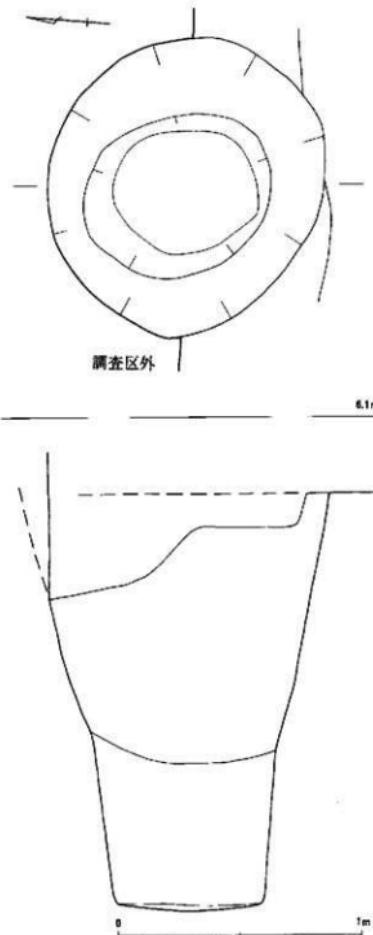
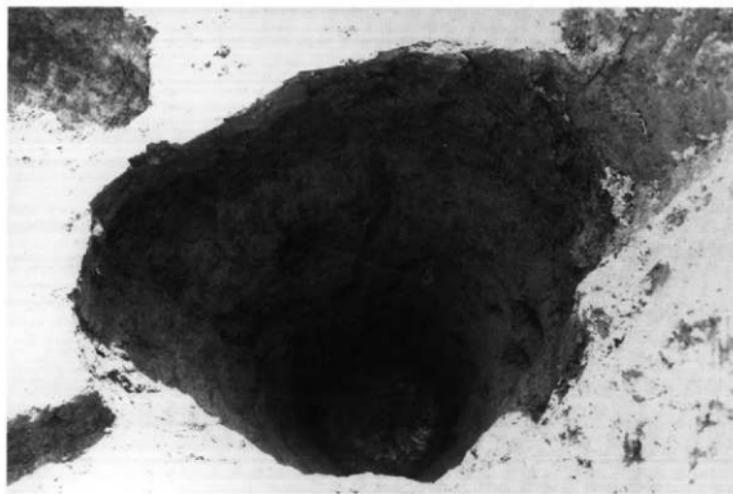


Fig. 60-17 5号井戸実測図 (1/20)



Ph. 60-16 5号井戸（北東より）

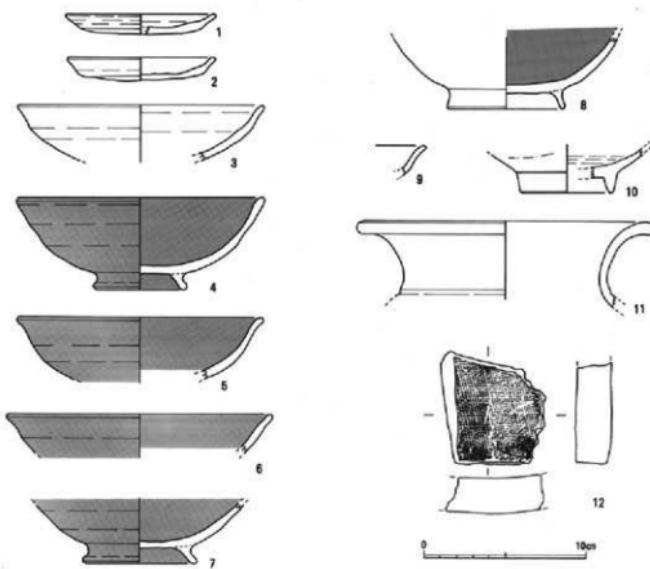


Fig. 60-18 5号井戸出土遺物実測図 (1/3)

(4) 埋葬遺構

第60次調査では、7基の甕棺墓（内2基は抜き跡）と2基の土壙墓を検出した。

甕棺墓は、成人棺2基、小児棺3基で、抜き跡の2基は、成人棺と思われる。また、構造的には、すべて合わせ口甕棺である。埋置レベルとしては、5号甕棺墓のみがひとりわ深く、全く削平を受けていなかった。土壙墓は、整然とした長方形箱型の掘り方を有するが、木棺の痕跡は認められなかった。

以下、甕棺墓・土壙墓の順にその概略について記す。

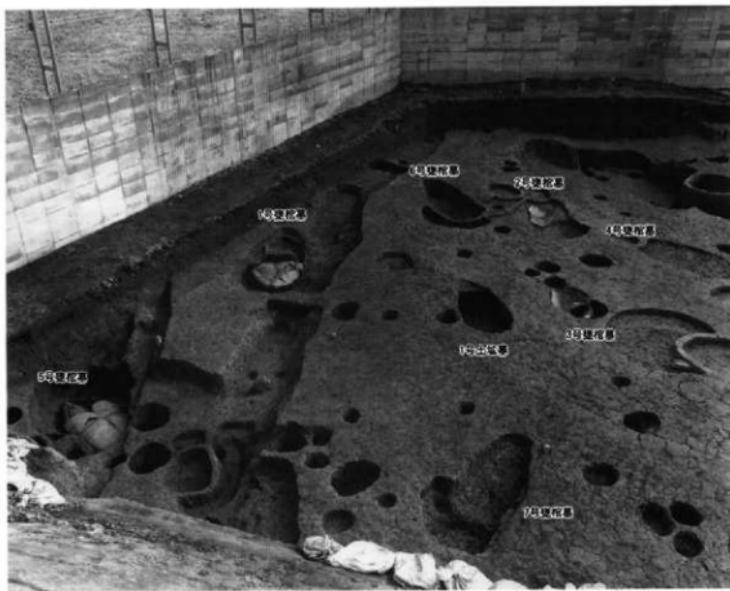
1号甕棺墓（SK-01）

調査区東辺近くから検出した甕棺墓である。古代の溝状遺構である3号溝に切られる。

成人用甕形土器2基を組み合わせた合わせ口甕棺であるが、合わせ口部分に目張り粘土は巻か



Ph. 60-17 1号甕棺墓上甕



Ph. 60-18 第1区埋葬遺構分布状況（北西より）

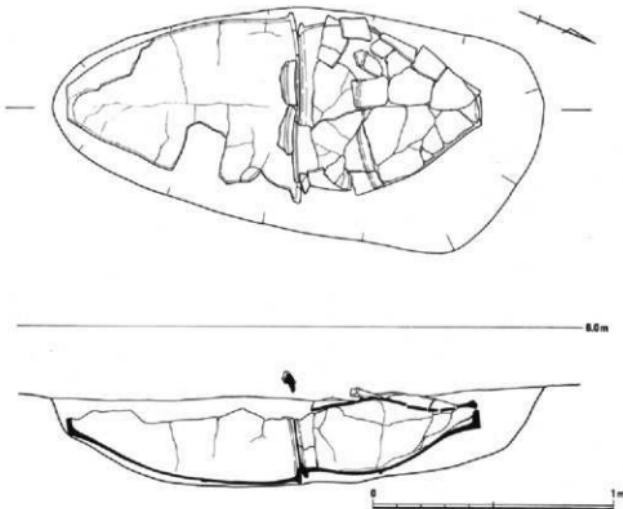


Fig. 60-19 1号壺棺墓実測図 (1/20)



Ph. 60-19 1号壺棺墓 (北東より)

れていなかった。主軸方位は、N-22°-Wを示す。

下壺は削平のために、過半を失っていた。口縁の一部のみが、原位置を保っていた。上壺は、土圧で下に落ち込んでいたために削平を免れ、ほぼ完形に接合することができた。

Fig. 60-21-1・2に上壺と下壺を図示する。口縁は粘土を貼り付け、T字形に作る。上壺の胴部中位には断面三角の突帯を一条、下壺の胴部中位には断面M字形の突帯一条を巡らせる。底部は、平底である。器表は荒れ気味で、調整痕跡はうかがえない。なお、迂闊なことに、調査終了後下壺の底部付近の破片を紛失している。3~5は、埋土中から出土した黒曜石の剥片である。

壺棺の特徴から、弥生時代中期中頃の壺棺墓と考えられる。

2号壺棺墓 (SK-05)

調査区の南辺近くで検出した壺棺墓である。日常土器の壺2個を合わせ口にした、小堀棺である。主軸方位は、N-25°-Wにとる。遺存状態はきわめて悪く、横置した壺棺墓の底面付近が残っていたにすぎない。なお、合わせ口部分には、目張りの粘土は認められなかった。

Fig. 60-21-6・7に、壺を図示する。6は上壺、7は下壺である。内湾する胴部の端に粘土帯を貼り付け、逆L字形の口縁を作る。口縁の直下には、断面三角形の突帯が、6では1条、7では2条巡る。器表は荒れ気味で、調整痕跡ははつ

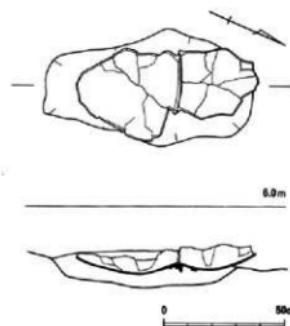


Fig. 60-20 2号壺棺墓実測図 (1/20)



Ph. 60-20 2号壺棺墓 (北西より)

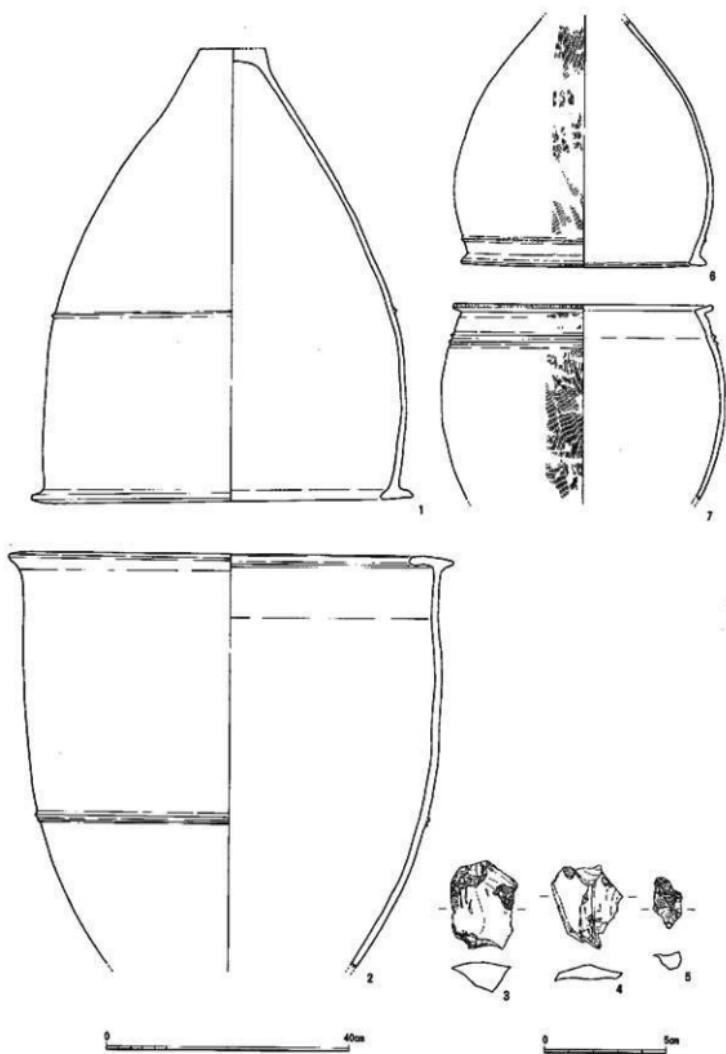


Fig. 60-21 1号、2号甕棺墓出土遺物実測図 (1・2・6・7…1/8、3~5…1/2)

きりと残らないが、それぞれ胴部外面に縱方向の刷毛目調整が認められる。

弥生時代中期中頃の壺棺墓である。

3号壺棺墓 (SK-09)

2号壺棺墓の3メートルほど北側で検出した壺棺墓である。日常土器の壺と鉢を組み合わせた合わせ口壺棺である。主軸方位は、N-40°-Wである。遺存状態は悪く、横置された壺棺の上半分は削平され、失われている。合わせ口部には、目張り粘土は巻かれていな



Ph. 60-21 3号壺棺墓上壺

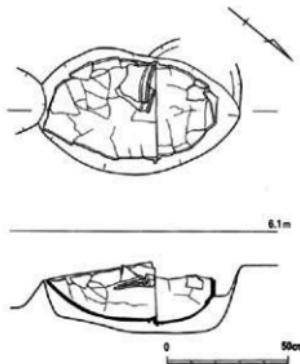
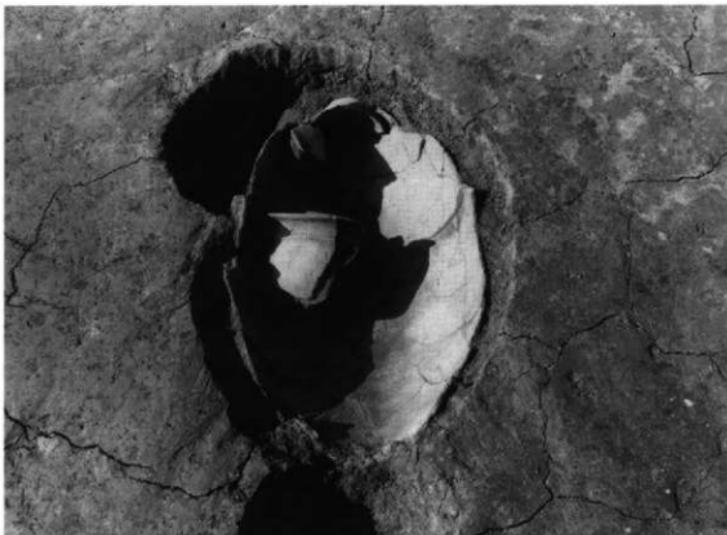


Fig. 60-22 3号壺棺墓実測図 (1/20)



Ph. 60-22 3号壺棺墓（南東より）



Ph. 60-23 4号壺棺墓（北東より）

かった。

Fig. 60-25-1は、大型の鉢形土器を用いた上壺である。底部は、上げ底氣味の平底である。2は、下壺である。器種の違いを除けば、口縁形態等の特徴は類似している。口縁には粘土帯を貼り付け、逆L字形を呈する。口縁直下には、断面三角形の突帯が巡る。なお、2の突帯には、刻み目がつく。器表は荒れ氣味で、調整痕跡は見にくくいが、2の外面には薄く縱方向の刷毛目調整が認められる。

弥生時代中期中頃の壺棺墓である。

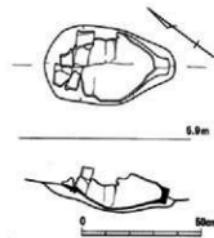


Fig. 60-23 4号壺棺墓実測図
(1/20)

4号壺棺墓 (SK-19)

調査区南辺近く、6号土坑に接して検出した壺棺墓である。直接的な切り合い関係にはないが、遺存部位から復元的に見れば、4号壺棺墓が6号土坑を切ることは明らかである。

合わせ口壺棺墓であるが、削平のため上壺は口縁部の一部が残るのみで、器種・形態を知り得ない。下壺は、日常土器の壺を転用している。主輪方位を、N-36°-Wにとる。口縁部に目張り粘土はみられない。

下壺をFig. 60-25-3に示す。底部は厚く、筒状を呈する。肩が張る胴部から内湾してすぼまった端部の外側に、粘土帯を貼り付けて、小さく折り返した口縁を作る。器表は荒れているが、胴部外面にはわずかに縱刷毛目調整がみられる。なお、上壺は遺存部位が少なく、図化できなかった。

弥生時代中期前葉の壺棺墓である。

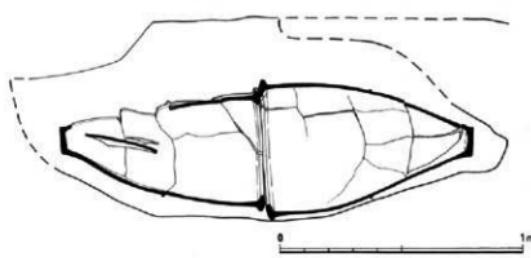
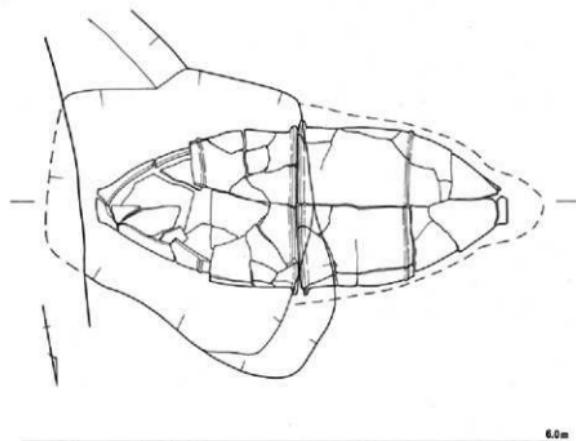


Fig. 60-24 5号墓墓室測圖 (1/20)



Ph. 60-25 5号棗棺墓（北より）



Ph. 60-26 5号棗棺墓（東より）

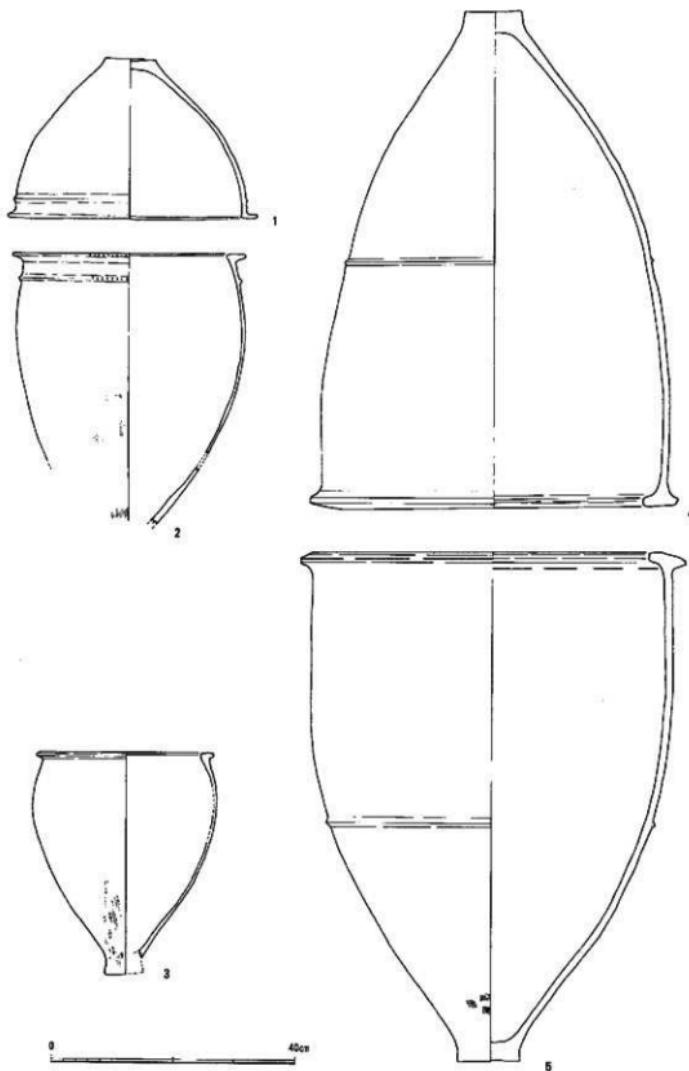


Fig. 60-25 3号、4号、5号窯棺墓出土遺物実測図 (1/8)

5号壺棺墓 (SK-20)

調査区東辺の中程から検出した壺棺墓である。1号堅穴住居跡と重複し、また、4号溝・5号溝にも切られるので、1号堅穴住居跡との切り合い関係は調査時には判断できなかった。出土遺物から判断して、1号住居跡が先行するものと思われる。

壺棺は、掘り込みが深く、ほぼ完存していた。掘り方は、いったん1メートル四方ほどの堅坑を掘った後、横坑を掘る。壺棺は、成人棺の合わせ口壺棺で、下壺をこの横坑に納め、ほぼ水平に据えていた。主軸方位は、N-100°-Eである。合わせ口部分に、目張りのための粘土は、巻かれていなかつた。

Fig. 60-25-4に上壺、5に下壺を示す。若干大きさは異なるが、同じタイプの壺である。底部はわずかにへこんだ平底で、胴部下端は強く締まる。口縁部は、粘土帯を貼り付け、やや外傾したT字形の鉢状口縁を作る。胴部中位からやや下に、断面三角形の突帯が一条巡る。器表は、摩減気味で調整痕跡が残らないが、5の胴部下位にはかすかに縱方向の刷毛目調整が残っている。

弥生時代中期中頃の壺棺墓である。

6号壺棺墓 (SK-02)

1号壺棺墓の3メートルほど南西で検出した土坑で、壺棺の抜き跡と思われる。長軸1.8メートル、短軸0.8メートルの長楕円形を呈し、検出面からの深さ30センチほどの船底型の掘り方を呈する。主軸方位は、N-44°-Wにとる。



Ph. 60-27 6号壺棺墓（北西より）



Ph. 60-28 7号壺棺墓（北より）

弥生土器片と石包丁 (Fig. 60-29-8) が埋土中から出土しているのみで、時期を限定できない。

7号壺棺墓 (SK-10)

5号壺棺墓の4メートルほど西で検出した土坑である。壺棺の抜き跡と思われる。長軸1.55メートル、短軸0.7メートルの長椭円形を呈する。検出面からの深さは22センチほどで、船底型にくぼむ。北側によって、さらに15センチほど下がった部分がある。調査時には識別できなかつたが、遺構の重複と考えられる。主軸方位は、N-10°-Eである。

埋土中から、弥生時代中期前半の壺片が出土している。

1号土壙墓 (SK-08)

1号壺棺墓の2.5メートルほど西で検出した土壙墓である。長側辺110センチ、小口辺45センチの、かなり整った長方形を呈する。四壁はほぼ垂直に立ち、床面は平坦で、検出面からの深さは、43センチ前後をはかる。木棺墓の可能性も検討したが、木棺の存在を推測させる痕跡は、何等見いだせなかつた。主軸方位は、N-28°-Wである。



Ph. 60-29 1号土壙墓（南より）

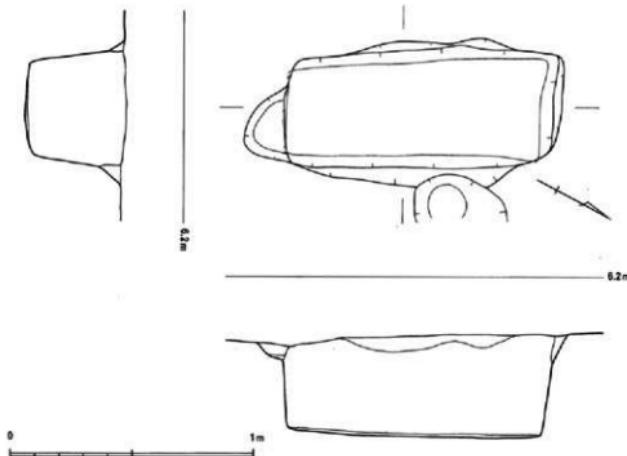


Fig. 60-26 1号土壙墓実測図 (1/20)

埋土中から、弥生時代中期初頭に比定し得る土器片が出土している。おおむね、その時期に當てて大過ないだろう。

2号土壙墓 (SK-11)

1号土壙墓から4メートルほど南西で検出した土壙墓である。長側辺130センチ、小口辺68センチの、やや丸みを帯びた長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち、床面もおおむね平坦といえる。検出面から床面までの深さは、約50センチをはかる。主軸方位は、N-8°-Wである。

埋土中より、壺の底部、蓋の頂部などが出土しており、弥生時代中期前葉に当たられる。土壙墓の時期としても妥当なところであろうか。



Ph. 60-30 2号土壙墓（北東より）

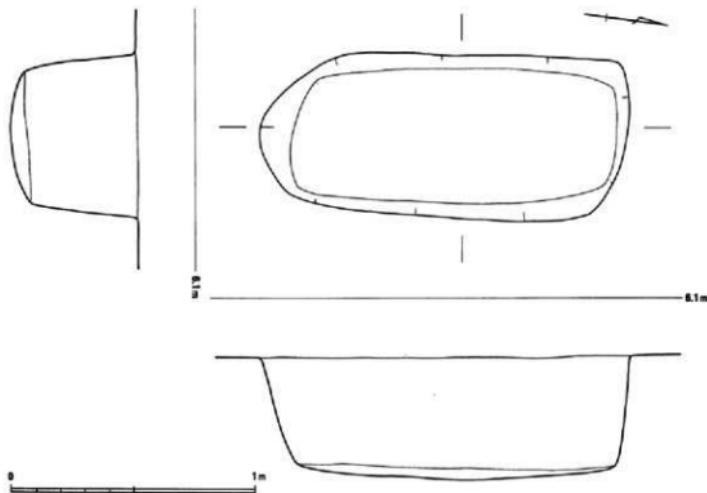


Fig. 60-27 2号土壙墓実測図 (1/20)

(5) その他の遺構と遺物

以下では、これまでの記述から漏れた遺構・遺物について、特筆する必要があると気づいたものを紹介する。

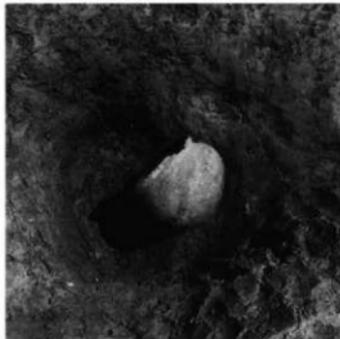
356号ピット (SP-356)

3号竪穴住跡のすぐ北側で検出した、柱穴状のピットである。直径40センチ強の略円形を呈し、検出面から底面までの深さは、57センチを測る。

埋土の上位より、小型の変形土器が出土した。横向きに転がった状態で埋め込まれたと思われる。

Fig. 60-29-4に、その姿を示す。口縁は、受け口状に小さく立ち上がる。底部は、やや尖り気味となる。体部外面の上半分は右下がりの叩き目調整、下半分は板状工具でなで上げる。頸部には、わずかに縱方向の刷毛目が見える。口縁部の内外面は、横方向のなで調整、体部内面は刷毛目調整する。外来系の土器と考えるが、管見の限りではその系譜を明らかにしえない。

弥生時代終末期におくのが妥当であろうか。



Ph. 60-31 SP-356土器出土状況

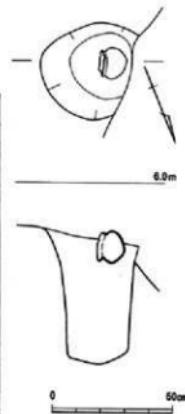


Fig. 60-28 SP-356実測図
(1/20)

4号溝・5号溝 (SD-04-05)

調査区の東辺から北辺を、斜めに横切る溝である。特に切り合い関係は認められないが、きれいに平行しており、同一溝の掘り直しと見るのが妥当であろう。

出土遺物のほとんどは弥生土器であるが、少量須恵器・土師器が出土しており、奈良時代前半の溝であると知れる。

第8次調査のSD031につながるものであろう。

その他の遺物

Fig. 60-29-1は、縄文時代晚期、夜白式土器の浅鉢片である。黒色研磨である。2は、弥生土器の壺であろう。外反する口



Ph. 60-32 4号溝・5号溝 (南東より)

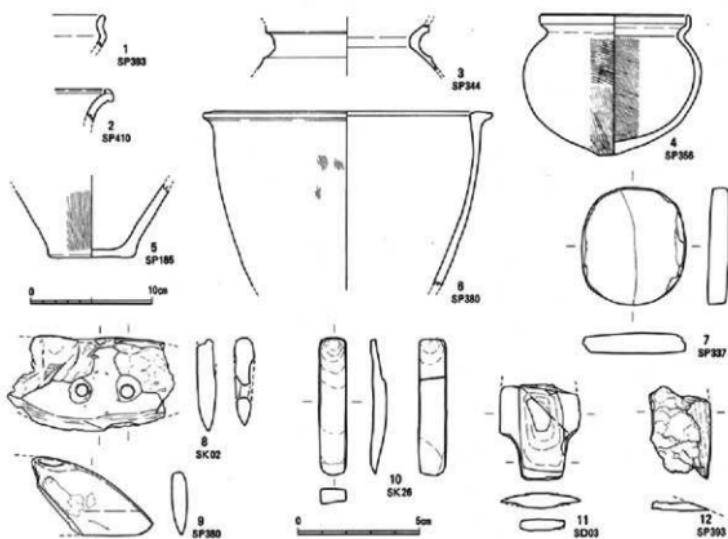
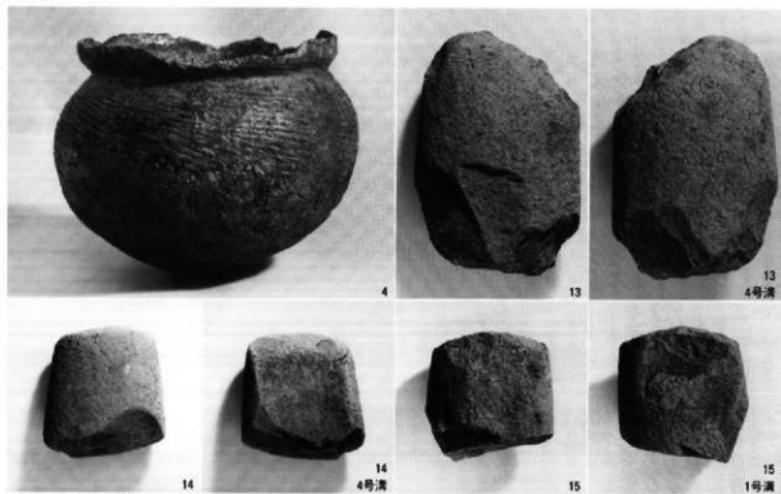


Fig. 60-29 その他の出土遺物実測図 (1~6…1/4、7~12…1/2)



Ph. 60-33 その他の出土遺物

縁の上端内側に粘土紐を貼り付け、内外に丸く肥厚した口縁部を作る。器壁は荒れているが、内面の一部にへら磨きが残っている。外來系土器と思われる。3は、鼓形器台である。器壁は荒れており、調整痕跡は残らない。山陰系土器である。4については、356号ピットの項で既に述べた。5は、弥生時代中期の壺の底部である。内面は指なで、外面は綿刷毛調整する。在地産の一般的な土器である。6は、弥生時代中期前葉の壺である。やや内湾気味に直立した口縁の外側に粘土を貼り付け、小さな逆L字形口縁を作る。これが出土した380号ピットは、前述した1号竪穴住居跡の内部にあり、柱穴のひとつにあたる可能性がある。

7~15は石製品である。7は、滑石を削って作った、円盤状石製品である。8は、石包丁である。両側端を欠く。小豆色を呈し、いわゆる立岩産の輝緑凝灰岩を用いている。6号豪棺墓（抜き跡）の埋土から出土した。9も石包丁であろうか。砂岩質の軟質の石材を用いている。10は、小型の柱状片刃石斧である。あるいは石鑿とするべきか。表裏面は、実測図上方からの打撃による剥離面をとどめている。両側面は、石理による面であるが、角を擦っているようなので、完形品と判断した。頁岩を用いるが、表面は白く風化している。11・12は、磨製石斧である。11は基部付近、12は身部の剥離した破片で、風化による割れが著しい。頁岩製である。Ph. 60-33-13~15は、磨製石斧である。いずれも欠損しており、完形品ではない。太形始刃石斧であろう。玄武岩製である。

第3章 小結

第60次調査では、弥生時代の竪穴住居跡3棟・土坑・井戸・豪棺墓・土塙墓・古墳時代の土坑、奈良時代の溝状遺構、中世の井戸などを検出した。奈良時代の溝状遺構は、第8次調査地点から続いて延びるものである。この他、多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物を抽出するにはいたらなかった。

これまで述べてきた遺構について、時期別に整理すると次のようになる。

弥生時代中期前半	1号竪穴住居跡
中期前半以前	6号豪棺墓
中期初頭	1号土塙墓・2号土塙墓
中期前葉	4号豪棺墓・7号豪棺墓
中期中葉	1号井戸・1号豪棺墓・2号豪棺墓・3号豪棺墓・5号豪棺墓
中期後半	3号竪穴住居跡
後期前葉	2号竪穴住居跡
後期前半	4号井戸
終末期	2号井戸・3号井戸・356号ピット
古墳時代前期初頭	28号土坑（竪穴住居跡？）
奈良時代前半	4号溝・5号溝
古代末～中世初頭	5号井戸

前述したように第8次調査で検出された、6世紀後半から7世紀前半に営まれた倉庫群と柵状遺構に関連する遺構は、全く検出されなかった。したがって、この官衙的遺構は、柵状遺構の内部にとどまり、その北側には及んでいないことが知れる。

弥生時代の豪棺墓群の分布、竪穴住居跡の分布など検討すべき課題は多いが、それについて周辺の調査成果の蓄積を待って、専論を期したい。

第 61 次 調 査

例　　言

1. 本書は博多区博多駅南6丁目62番における事務所ビル新築に伴い、福岡市教育委員会が平成8年度（1996年度）に実施した比恵遺跡群第61次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
4. 製図は長家、山野妙子、戸畠智恵子が行った。
5. 遺構写真は長家が撮影した。
6. 遺物写真は長家が撮影した。
7. 遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は井戸（S E）、土坑（S K）、溝（S D）、ピット（S P）である。
8. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
9. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
10. 本書に掲わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
11. 本書の執筆・編集は長家があたった。

本文目次

Iはじめに	65
1. 調査に至る経過	65
2. 調査体制	65
II調査の記録	66
1. 調査概要	66
2. 遺構と遺物	69
3. 小結	75

挿図目次

第1図 調査区位置図	(1/6,000)	66
第2図 調査区位置図	(1/500)	67
第3図 全体図	(1/100)	68
第4図 井戸実測図	(1/40)	70
第5図 SE01出土遺物実測図	(1/3)	71
第6図 SE03出土遺物実測図	(1/3)	72
第7図 SE06・07・08出土遺物実測図	(1/3)	73
第8図 土坑・溝実測図	(1/40)	74
第9図 その他の遺物実測図	(1/3)	75

写真1	作業風景	76
写真2	調査区全景(西から)	76
写真3	SE01(北から)	77
写真4	SE01土層	77
写真5	SE02(南から)	78
写真6	SE03土層	78
写真7	SE04(南から)	79
写真8	SE06(北から)	79
写真9	SE08(北から)	80
写真10	SK09(東から)	80
写真11	SK09土層	81
写真12	出土遺物	81

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成8年11月8日付けで九鉄工業株式会社代表取締役社長神谷牧夫氏より埋蔵文化財課宛に博多区博多駅南6丁目62番1・67番の物件(1,011.27m²)に関しての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。(事前審査番号8-2-360)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれている。また申請地は平成3年に事前審査番号3-2-294で受付、試掘調査を行っており、既に溝・井戸等の生活遺構が確認されていた。

このため埋蔵文化財課では遺跡の存在する旨を回答し、埋蔵文化財の取扱について協議することになった。協議の結果新社屋建設予定地の約400m²については遺構の破壊が避けられないため発掘調査を行い記録保存を図ることとした。また西側及び北側の玄関・駐車場部分については現地表から遺構面まで約1.5mあり、工事によっても遺構が破壊されないため盛土保存とする事とで協議が成立した。これを受けて委託契約を締結し発掘調査・資料整理を行うこととした。

発掘調査は平成9年3月3日～平成9年3月24日の期間で行った。調査対象地は約400m²であるが擾乱による破壊が著しい南側は調査対象から外し、実際の調査面積は273m²となった。また遺物はコンテナ11箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、事業主体である九鉄工業株式会社の皆様には調査についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

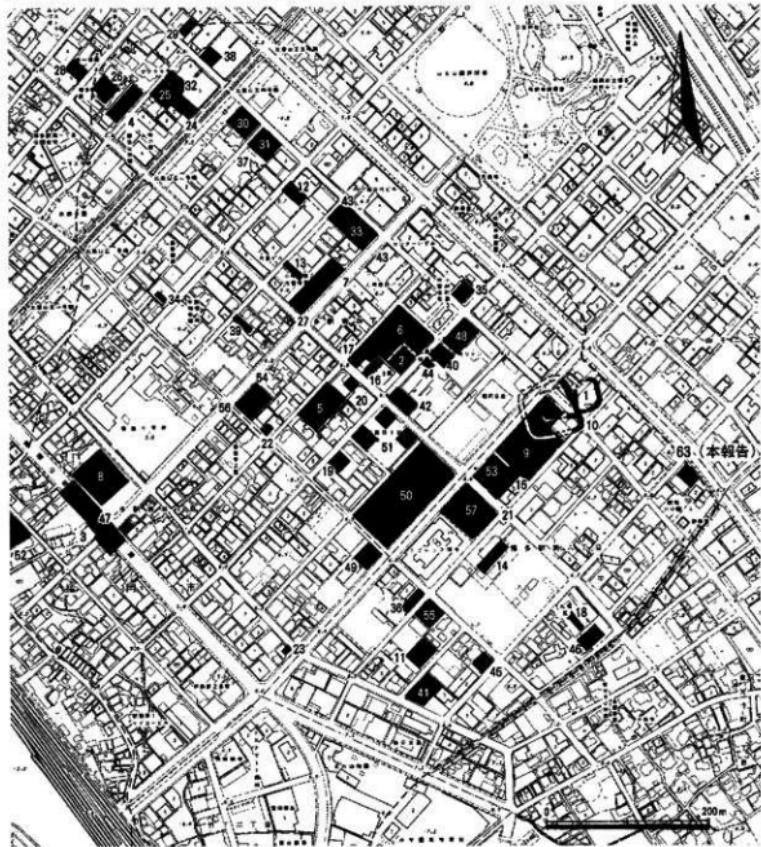
事業主体	九鉄工業株式会社			
調査主体	教育委員会埋蔵文化財課			
調査統括	同	埋蔵文化財課	課長	荒巻 雄勝
	同		第二係長	山口 讓治
調査庶務	同		第1係	西田 結香
調査担当	同		第2係	長家 伸
調査作業	柳瀬伸	臨田栄	寺岡恵美子	安元尚子
整理作業	花田則子	池塙子	吉村智子	小池温子
	小路丸良江	山野妙子	今林加津江	平本恵子
			増田ゆかり	水田優子
				指原始子
				草場恵子

II 調査の記録

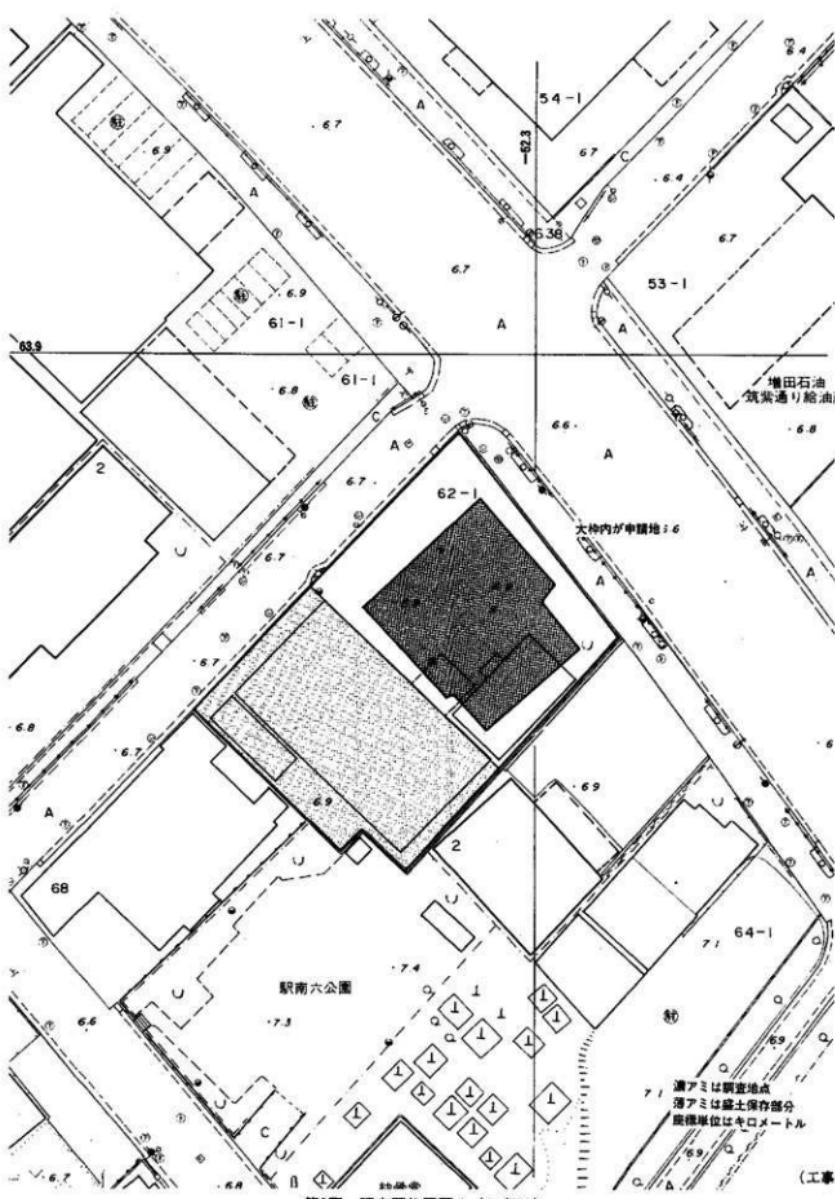
1. 調査概要

比恵遺跡群は福岡平野の北側に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた南北に伸びる洪積台地上に立地する。現在は区画整理によって平坦な地形を呈し、標高は5~10mを測る。今回の調査対象地は遺跡群の東側端部に位置し、周辺の調査事例が比較的少ないブロックにあたる。

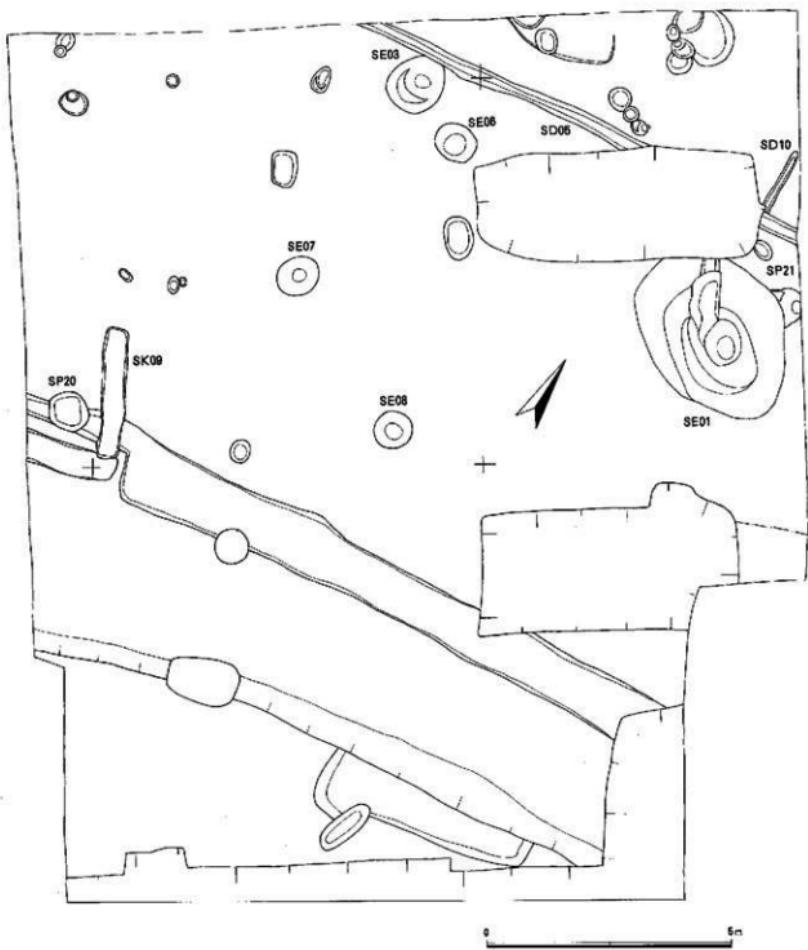
対象地は事業所内の駐車場として利用されており、現況で標高6.8m程度を測る。調査は上部のコンクリート、盛土を重機によって除去した。遺構面は鳥栖ローム層上面であるが、以前の耕作・区画整理による削平が非常に著しく遺構面はロームの最下部で、遺構の遺存状態は非常に悪かった。遺構面は耕作面の影響で南側が一段高くなり標高6m、低くなった北側で標高5.2mを測る。検出遺構は溝・井戸・上坑・ピット等であるが遺構のあり方は非常に散漫である。



第1図 調査区位置図 1 (1/6000)



第2図 調査区位置図 2 (1/500)



第3図 全体図 (1/100)

2. 遺構と遺物

井戸（S E）

SE01（第4図）

調査区東端で検出する。一部を掘乱によって欠失するが、上面径3.9m×2.8mの楕円形を呈し、深さは1.3mを測る。断面は階段状に掘り下げ、底面は灰色硬砂層に達している。また西側壁面には幅40cm～60cm、深さ5cm～20cmの溝状の掘り込みがあるが、性格は不明である。埋土は全体に均質なレンズ状の堆積をなし、下半部にはローム小ブロック、粗砂が含まれている。遺物には壺・壺・高杯・小型壺・鉄製品等がある。

出土遺物（第5図） 1～3は二重口縁を有する。1は最下層から出土した壺で1/2残存する。外周全体に厚く煤が付着している。胴部外面は擬刷毛を行い、上半部には後に横刷毛を施す。内面は上半横方向、下半縱方向のヘラ削りを行う。器壁は厚手で、胎土に石英砂粒を多く含んでいる。2は全体の磨滅が進んでいる。3は壺である。口縁部は直立し、屈曲部分はシャープに張り出している。胎土には石英砂粒が多い。4は口縁部を緩く反転させる壺である。端部は肥厚気味で上方に僅かにつまみ出す。胴部外面には刷毛目が残り、内面はヘラ削りを行う。色調赤褐色である。5は布留式の壺である。6～8は壺である。6は口縁部は広口で直線的に開き頸部に突宍を造らせる。色調赤褐色で胎土には石英砂粒を多く含む。7は口縁部を全く小型品である。胴部は扁球形に張り底部はほぼ丸底である。8は口縁部を欠く。外面下半にヘラ削りを行い、内面には全体に刷毛目を有する。9は脚付き鉢の脚部分である。底径10cmを測る低平な脚である。10・11は高杯である。屈曲部に穿孔する。12は断面5mm角の棒状鉄器である。上端部分は潰れてひしゃげている。敲打によるものであろうか。

SE03（第4図）

調査区北端で検出する。北側をSD05に切られる。上面径1.2mの円形を呈し、深さは60cmを測る。掘り方は南側に一段平坦面を有し2段となる。また掘削は八女粘土層中で止まっている。土師器壺・壺・碗・高杯が出土している。

出土遺物（第6図） 13は布留式の壺である。器壁は磨滅が進み、色調灰褐色を呈する。口縁端部は内側につまみ出し、胴部内面はヘラ削りを行う。14は壺の口縁部である。内面に横刷毛が残る。15は鉢である。胴部上方1/3程で最大径を有する。内外面に刷毛目が行われる。胎土は精良である。16～18は高杯脚部である。屈曲部に穿孔を行う。19は器台である。上面径7cm、底径11.6cm、器高7.8cmを測る。胎土には石英砂粒が多く混ざる。20は大型の壺胴部破片である。粘土帯接合部分で剥落している。色調橙色を呈し、胎土には微砂粒を僅かに含む。内外面刷毛目による。

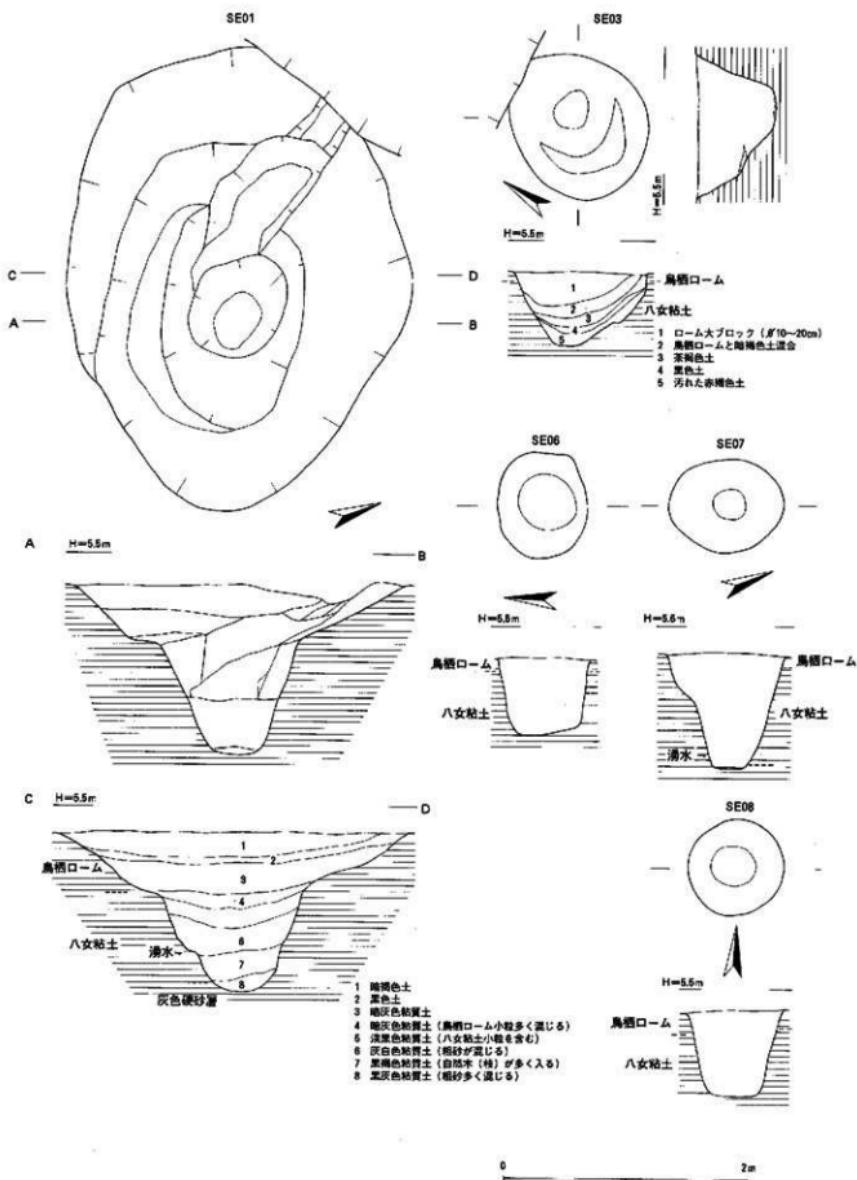
SE06（第4図）

調査区北端で検出する。上面径90cm×70cmの楕円形を呈し、深さは65cmを測る。埋土はやや茶味を帯びた黒褐色土で鳥栖ロームブロックを含んでいる。また掘削は八女粘土層中で止まっている。土師器壺・壺・碗・高杯・器台が出土している。

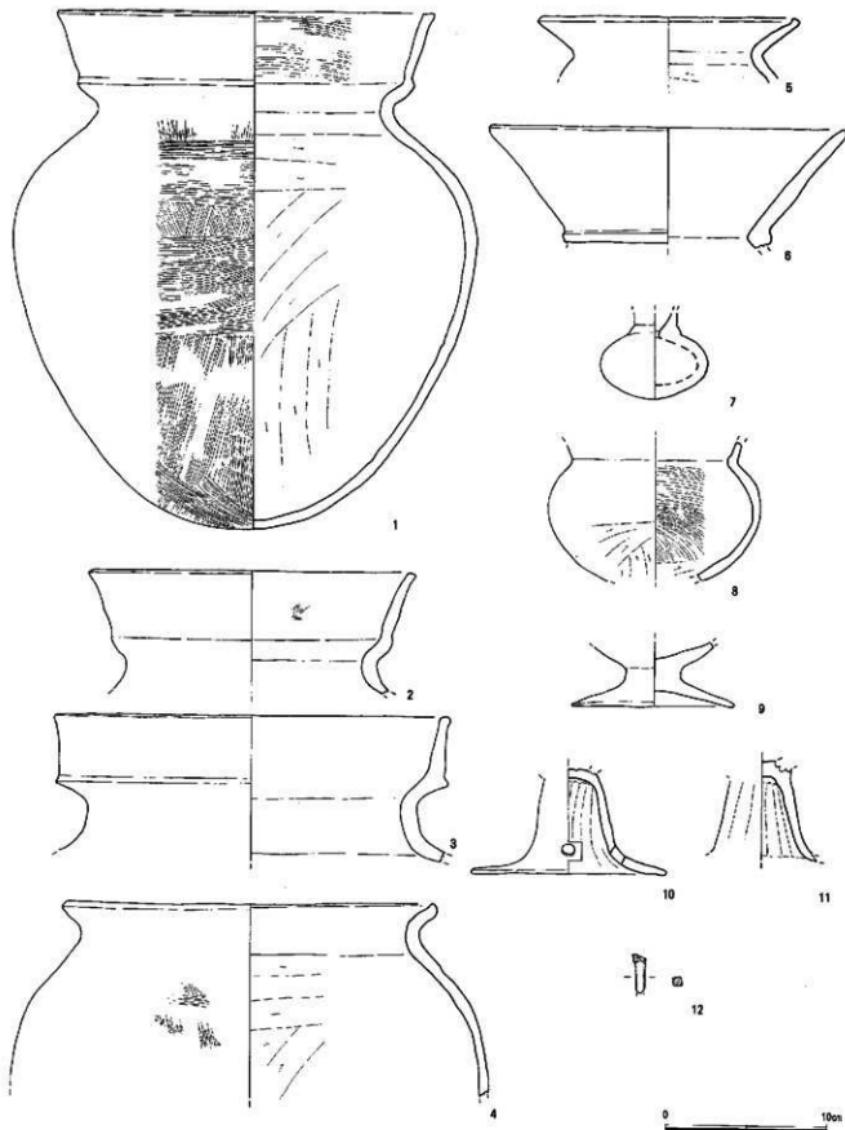
出土遺物（第7図 21～29） 21・22は壺である。21は外面に擬刷毛が残る。22は二重口縁の頸部である。外面は磨いており、胎土は精良、色調橙色を呈する。23～25は高杯脚部である。26は低平な脚である。裾部には3箇所に穿孔を行い、径3.5cmの中実錐状の筒部を有する。27～29は小型器種の碗・壺・器台である。

SE07（第4図）

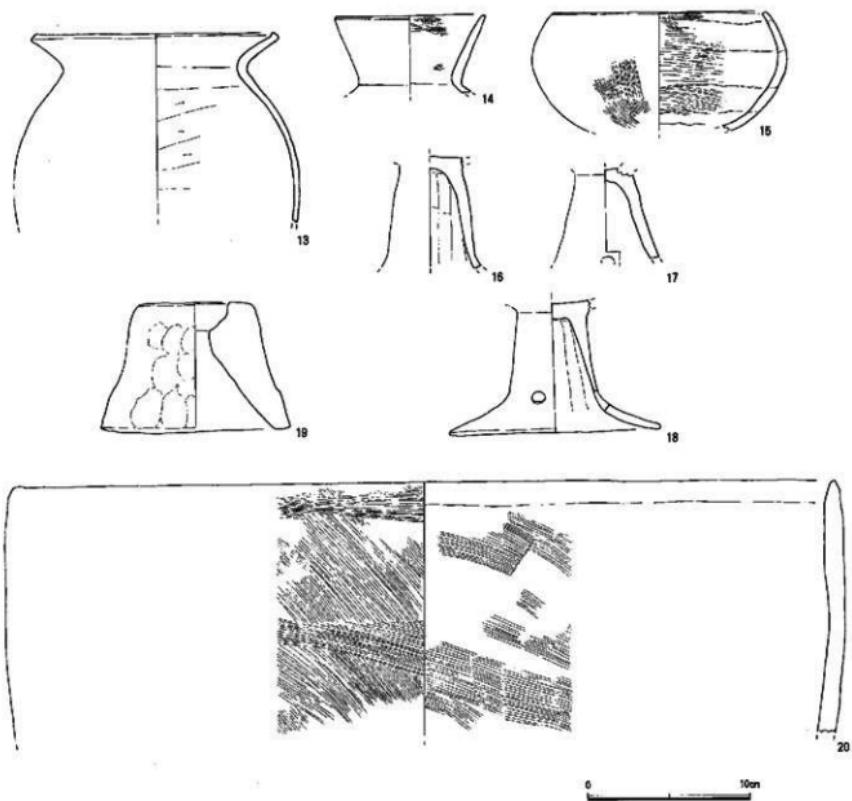
調査区北側で検出する。上面径95cm×75cm楕円形を呈し、深さは1mを測る。埋土はロームブロックの少ない黑色土である。また掘削は粗砂層上面に及び標高4.4mで湧水する。遺物は検出面から50



第4図 井戸実測図 (1/40)



第5図 SE01出土遺物実測図 (1/3)



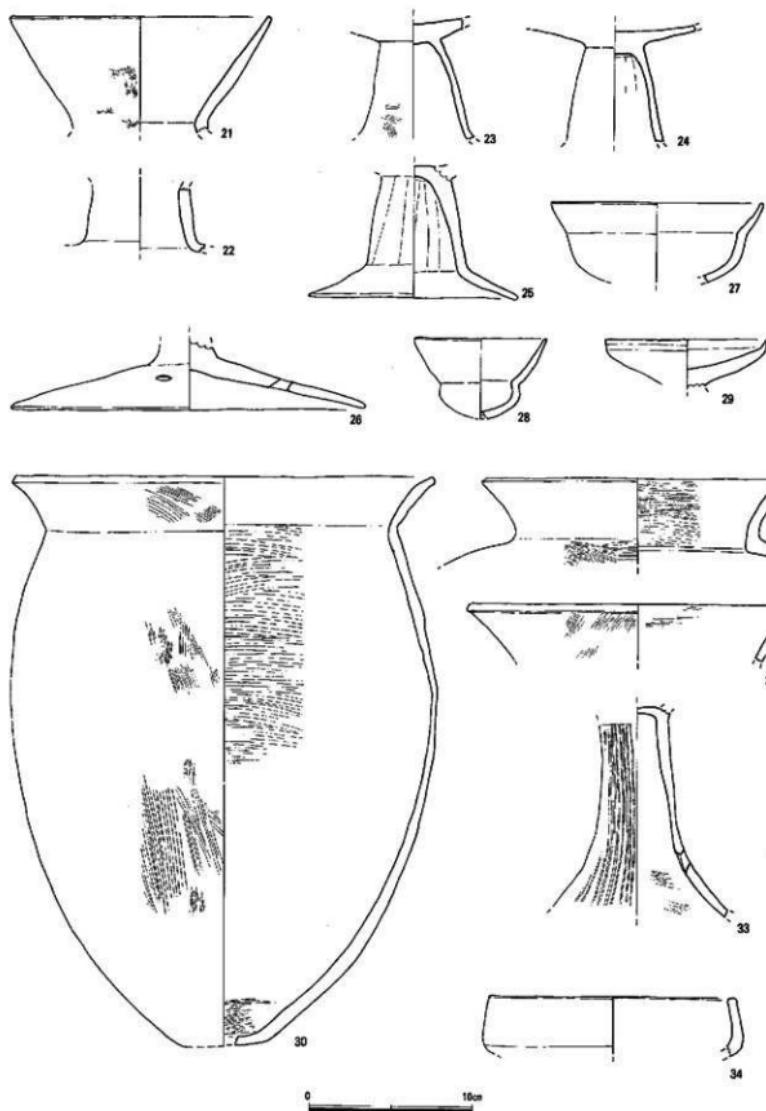
第6図 SE03出土遺物実測図 (1/3)

cm程の所でまとまって出土している。壺・壺が出土している。

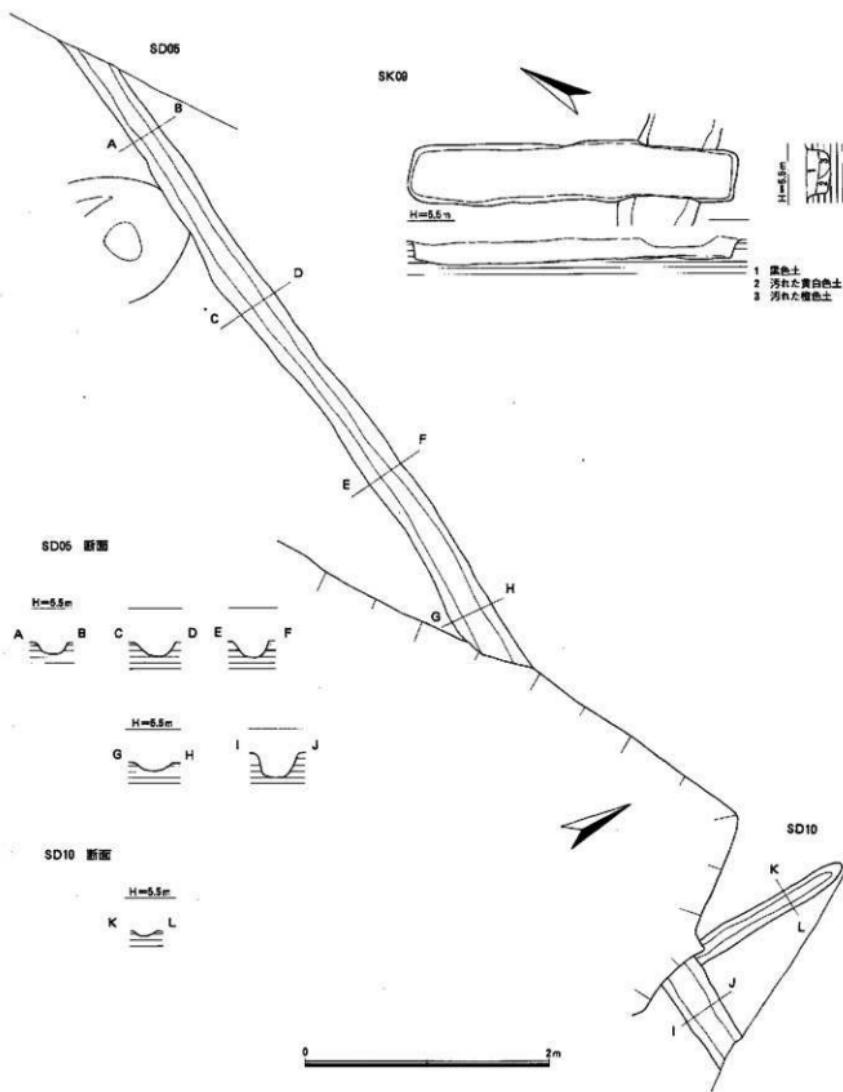
出土遺物（第7図 30～33）30は長胴の壺である。口縁部は「く」字状に屈曲し先端が僅かに外反する。また端部は面取りを行う。胴部は最大径を中位よりやや上に持ち、内外面共に刷毛目による調整が行われる。外面下半には2次焼成による赤変が残る。底部は凸レンズ状を呈する。32も同様の壺口縁部である。31は壺である。胴部はやや肩が張るものであろう。刷毛目による調整が行われる。胎土に石英砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。33は高坏脚部である。筒部は総磨きを行ふ。また穿孔は対向する2箇所に行われる。

SE08 (第4図)

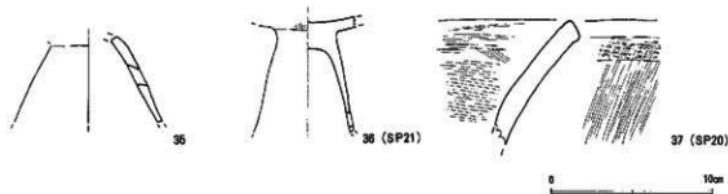
調査区中央北寄りで検出する。上面径80cmの凹形を呈し、深さは70cmを測る。埋土は黒色土で鳥摺



第7図 SE06・07・08出土遺物実測図 (1/3)



第8図 土坑・溝実測図 (1/40)



第9図 その他の遺物実測図 (1/3)

ロームブロックを含んでいる。また掘削は八女粘土層中で止まっている。遺物は少量で甕・壺破片が出土するのみである。

出土遺物 (第7図 34) 34は小破片で傾きに疑問が残るが、複合口縁壺の口縁部である。色濃橙色で胎土には微砂粒が多く含んでいる。

土坑 (SK)

SK09 (第8図)

調査区西端で検出する。長軸2.3m、短軸50cm、深さ20cmを測る平面長方形の土坑である。壁はほぼ直立し底面は平坦であるが一部に細かな凹凸が見られ、掘削の工具痕と考えられる。埋土2・3層はロームによる埋め戻しの土であり、1層の黒色土とは明らかに異なる。形態・埋土から土坑墓の可能性も考えられる。遺物は小破片が蕉葉に出土するのみで時期は不明確であるが、弥生時代のものであろうか。

溝 (SD)

SD05 (第8図)

調査区北側で検出する。方位を東西方向にとる。埋土は黒褐色土で幅30~40cm、深さ5~15cmを測る。遺物は小破片のみで小型器種があり、古墳時代前期に属するものと考えられる。

出土遺物 (第9図 35) 器台の脚部である。小破片で磨滅が進んでいる。穿孔を行う。

SD10 (第8図)

調査区北側で検出する。調査時にはSD05に切られると思ったが、方位を正確に東西にとっておりSD05に直交するなど有機的な関連も考えられる。幅20cm、深さ5cmを測る。遺物は小破片のみで時期の詳細は不明である。

その他の遺物 (第9図)

ピット出土の遺物である。36は高坏で磨滅のため調整不明。37は大型甕の口縁部破片である。外面上部にタキが若干残っている。

3. 小結

本調査区は削平が著しく造構の残りは不良であったが、井戸を中心とした掘削深の深い造構をかろうじて検出することが出来た。井戸は弥生時代後期に属するもの (SE07・SE08)、古墳時代前期前半に属するもの (SE03・SE06)、古墳時代前期後半に属するもの (SE01) を検出した。調査地点は台地の縁辺にあたり、未検出ながら竪穴住居跡などの他の生活造構との関連が考えられ、周辺の調査が期待される。またSD10・SD05は方位をほぼ東西南北に取り、何らかの区画を意識した可能性がある。

本調査区は比恵遺跡群の中でも調査事例の少ない地点であり今後に期するところが多いが、生活造構の検出で重要な成果を挙げたと言えよう。



写真1 作業風景



写真2 調査区全景（西から）



写真3 SE01（北から）



写真4 SE01土層

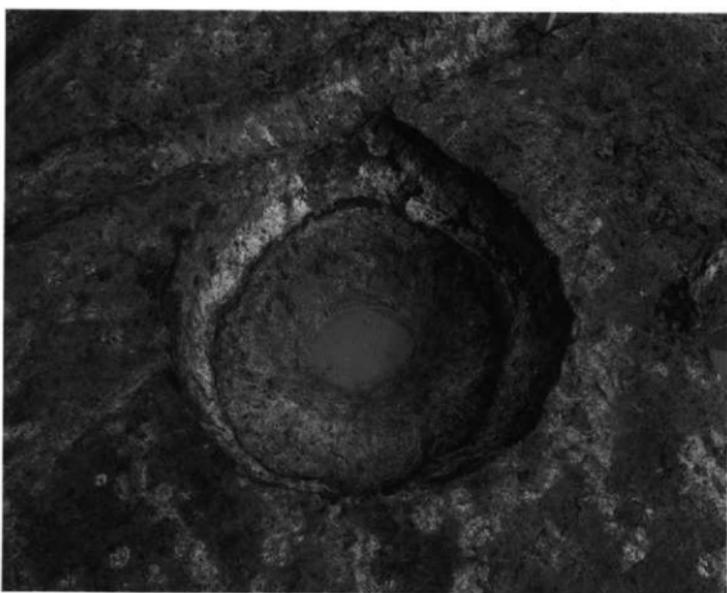


写真5 SE03 (南から)

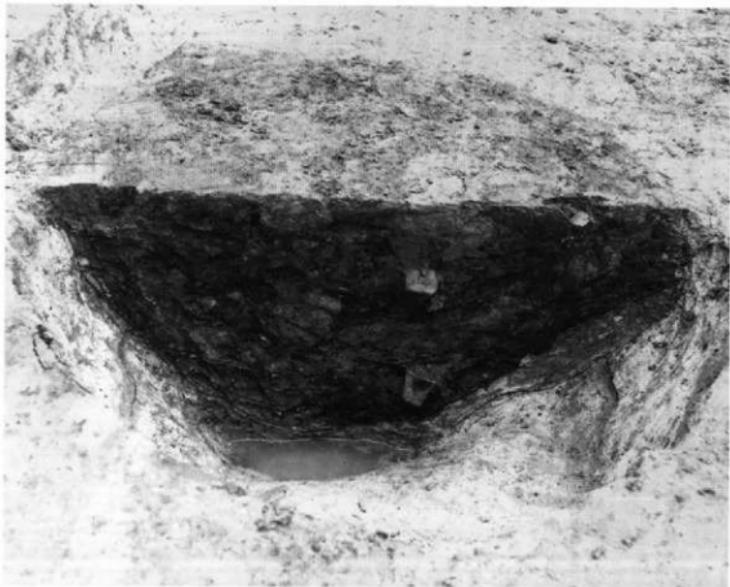


写真6 SE03土層

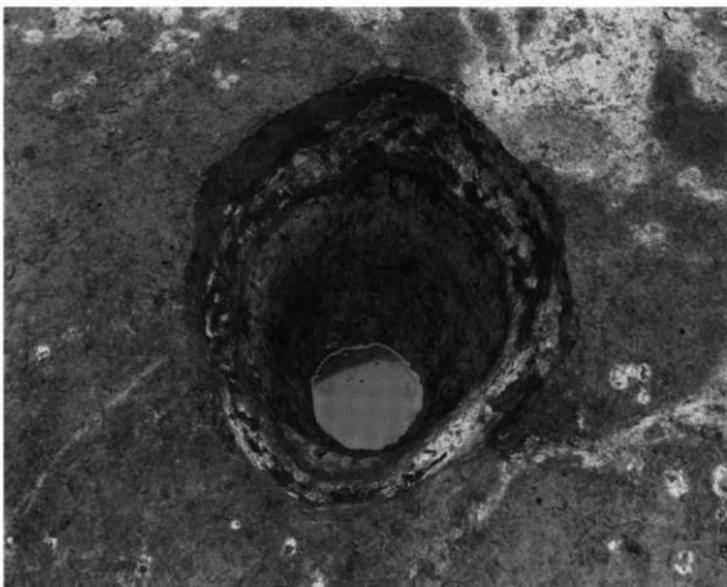


写真7 SE04（南から）

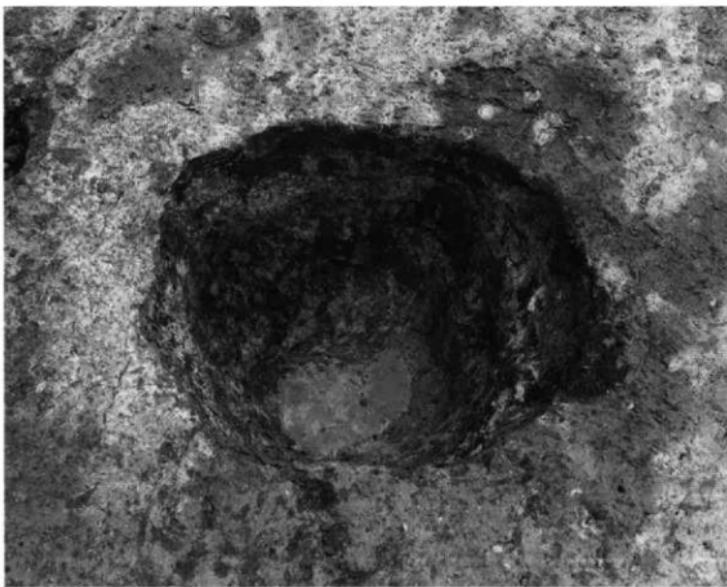


写真8 SE06（北から）



写真9 SE08（北から）



写真10 SK09（東から）

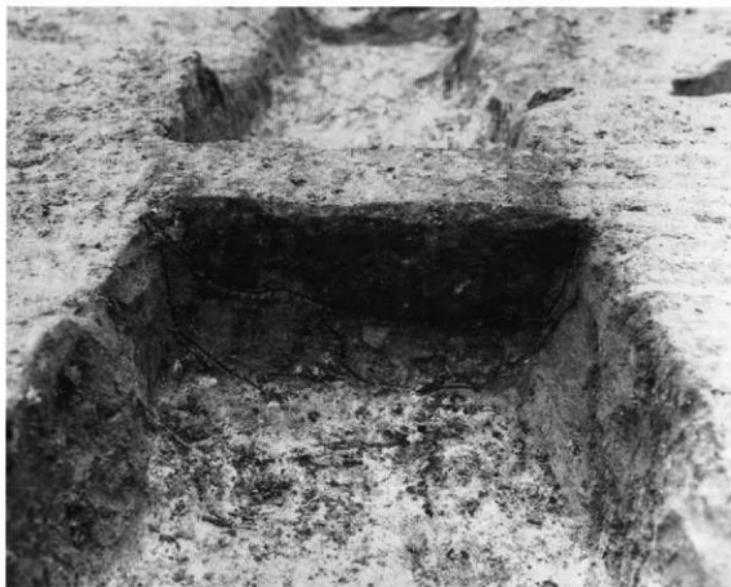


写真11 SK09土層



写真12 出土遺物

比恵遺跡群26

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第562集

1998年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 弘文社印刷株式会社
